

秋 田 市

久 保 田 城 跡

—千秋公園再整備計画黒門再建に伴う発掘調査報告書—

2009. 3 秋田市教育委員会

序

秋田市は、秋田市千秋公園地内に千秋公園再整備計画に伴う黒門の再建を計画しました。この黒門は古絵図等に複数描かれていますが、門の形は記号化されていたり、その構造や位置も不明でありました。そこで黒門再建のためには周辺の状況を含めて発掘調査を実施し、位置や構造等を確認することが必要となりました。

黒門は、久保田城の正式な登城ルート上に位置する主要な門のひとつであります。調査の結果、江戸時代に建築された黒門と考えられる建物跡や内堀に架かる橋の橋脚の一部などが発見され、古地図等に示されている黒門周辺の状況が明らかにされるなど、久保田城跡を究明する上で貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様には感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成21年 3 月

秋田市教育委員会
教育長 高 橋 健 一

例 言

- 1 本報告書は、平成19、20年度に実施した千秋公園再整備計画黒門再建に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、事業主体者が秋田市都市整備部公園課、業務受託者が株式会社 本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会文化振興室の体制で実施した。本発掘調査経費は、事業主体者である秋田市都市整備部公園課が負担した。
- 3 本報告書の執筆・編集および写真撮影は西谷隆が行い、石郷岡誠一の指導と安田忠市・伊藤才城の協力を得た。
- 4 本報告書刊行以前に、現地説明会資料や報道等により調査成果の一部が公表されているが、本報告書の記載内容をもって正式なものとする。
- 5 出土遺物の陶磁器類については、佐賀県有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定をお願いした。
- 6 発掘調査、整理作業の過程で、下記の関係機関および各氏より指導、助言、協力を賜った。(敬称略・順不同)
文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、秋田城跡調査事務所、日野久

凡 例

- 1 図中には下記の略記号を用いた。
SB—門跡、SA—柱列、SD—溝跡、SX—橋脚掘り方
- 2 図中の地図には、秋田市管内図 1/50,000、同 1/25,000、都市計画図 1/2,500を使用した。
- 3 本文中の遺物については、陶磁器・瓦の基礎分類ごとに記述した。
- 4 本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯の製品も含め「系」として示した

目 次

序

例 言

凡 例

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 発掘調査の経過	1
第 3 節 整理作業の経過	3
第 2 章 遺跡の位置と環境	4
第 1 節 地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	4
1 周辺の遺跡	4
2 久保田城跡の概要	9
第 3 章 調査の方法と成果	11
第 1 節 調査の方法	11
第 2 節 層序	11
第 3 節 遺構と遺物	16
1 門跡	16
2 柱列	21
3 溝跡	22
4 唐金橋橋脚掘り方	24
5 出土遺物	26
6 出土遺物属性表および実測図	26
第 4 章 まとめ	30

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

秋田市都市整備部公園課は、千秋公園再整備計画で久保田城黒門跡の再建を検討しており、絵図等に複数描かれている門の位置や、櫓門等として描かれている門の構造を確認する必要がある。そこで公園課は黒門の再建に関しては解明すべき事項があることから秋田市教育委員会に発掘調査を依頼し、その解明に努めることとした。

黒門が位置すると考えられている園路の一部や北側の土塁下の部分は平成4年に調査を実施しているが、未調査地を含め再度この周辺の発掘調査を2ヵ年で行うこととした。平成19年度は10月16日付けで公園課から埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出され、これを受けて10月29日付けで秋田県教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第99条第1項）を提出した。そして、平成19年10月30日付けで事業主体者の秋田市長と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社本郷建設工務所の3者で発掘調査に関する協定書を結び、調査を実施した。平成20年度は9月10日付けで公園課から埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出された。これを受けて9月29日付けで秋田県教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第99条第1項）を提出し、平成20年9月30日付けで事業主体者の秋田市長と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社本郷建設工務所の3者で発掘調査と整理作業に関する協定書を結び、10月14日から12月12日まで調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

平成19年度

発掘調査対象地である千秋公園南東側入り口の園路周辺は、久保田城の正式な登・下城ルート上に位置する黒門が所在した場所である。調査は平成19年11月2日から実施し、調査区のアスファルト剥ぎ、碎石除去を開始した。11月7日から平成4年度調査地の埋戻し土の除去作業を行い3層面を表し、11月14日から平成4年度に検出した掘り方、溝跡等を表す。11月16日からは園路に埋設した電線部分の埋土除去作業を開始する。千秋公園案内板周辺から方形の掘り方を1個検出し、周辺の精査を行ったが他の掘り方は検出できなかった。11月20日から二の丸側の電線埋設溝部分を利用して掘り方等の確認作業を実施する。11月22日掘り方状の落ち込みを発見したが、詳細に精査したところ地山の変化と判明した。11月26日には枡形地域の遺構精査を行う。溝が数条検出されたが、埋土状況や重複関係から近・現代の溝と判明した。11月28日から電線埋設溝を利用し、土層断面図作成を行う。11月30日、全域の写真撮影を実施する。12月4日には調査区東側から平面図作成を実施する。12月6日に黒門懇談会が開催され現地で説明を行った。また、12月8日には市民を対象とした現地説明会を行い、120名の参加者があった。12月10日、全景写真撮影を行う。12月11日に機材の撤収作業、12月14日から埋め戻し作業を開始し、12月15日に全工程を終了した。

調査期間	平成19年11月2日～12月15日
調査面積	117㎡（調査対象面積150㎡）
事業主体者	秋田市都市整備部公園課

第1章 調査の概要

調査担当者 秋田市教育委員会文化振興室
調査体制 文化振興室 室長 小松正夫
参事 赤川 衛
室長補佐 加藤隆子
副参事 中田好彦

文化財担当

主席主査 西谷 隆 (調査担当・主務者)
主席主査 安田 忠市
主事 進藤 靖
主事 鎌田 英智
主事 小野 隆志 (調査担当)
主事 伊藤 才城

業務受託者 株式会社 本郷建設工務所

調査作業員 佐藤忠喜、小松田税、倉部博美、石川巖、佐藤兼雄、
山本峰吉、松田忠、星野喜一郎、桑原勉、鎌田一夫、
加賀谷久仁夫、土田節子、伊藤かず子、佐藤良子、
秋山良子

平成20年度

平成20年10月14日から調査区のアスファルト剥ぎ、碎石除去を開始した。引き続き3層面の精査を行い掘り方を検出し、写真撮影、掘り方の断ち割りを実施し、10月20日に掘り方の断面写真撮影を行う。園路部分で礎石が現れている掘り方は埋土中にガラス片が混じることから、動かされされていることが判明した。また、北側土塁下の段状部分は平成4年度調査地の埋戻し土を除去し、掘り方等の確認、写真撮影、断ち割りをを行う。10月27日から調査区西側で検出していた溝跡の写真撮影と掘り下げを行う。また、唐金橋側の掘り下げを開始する。10月30日より西側から平面実測を開始する。11月5日からは黒門に取り付く北側の土塁上に、何らかの遺構の存在の有無を調査することを目的にトレンチ調査を開始する。11月11日に調査区全景および西側・南側・東側からの写真撮影を行う。11月12日、唐金橋橋脚部掘り方底部より木材片を検出。また、掘り方内部の精査を開始する。写真、平面図、エレベーション図作成。11月21日、黒門懇談会が開催され、現地で説明を行った。また、11月29日には市民を対象とした現地説明会を行い、90名の参加者があった。12月1日から3日まで北側調査地の埋め戻し作業を行う。12月4日から唐金橋西端南側の調査を開始する。平成4年度調査の埋め戻し土を除去し、橋脚掘り方の再確認と東側未発掘部分の調査を行う。橋脚掘り方から約2.7m東側で直径20cm前後の柱痕跡を3個検出した。土留め杭の一部と考えられた。12月10日に機材の撤収作業、12月11日から埋め戻し作業を開始し、12月12日に全工程を終了した。

調査期間 平成20年10月14日～12月12日
調査面積 80㎡ (調査対象面積160㎡)
事業主体者 秋田市都市整備部公園課

調査担当者	秋田市教育委員会文化振興室		
調査体制	文化振興室	室長	石郷岡 誠 一
		参事	赤 川 衛
		課長補佐	加 藤 隆 子
	文化財担当		
		副参事	安 田 忠 市
		主席主査	西 谷 隆 (調査担当・主務者)
		主査	進 藤 靖
		主事	鎌 田 英 智
		主事	伊 藤 才 城
業務受託者	株式会社 本郷建設工務所		
	調査作業員	倉部博美、石川巖、佐藤兼雄、山本峰吉、松田忠、 星野喜一郎、鈴木銀一、鈴木長司、三浦吉司、佐々木昇三、 渡辺範、水戸瀬厚志、斉藤司、鈴木慶子、鈴木鈴子	

第3節 整理作業の経過

平成20年度

平成21年1月9日から出土遺物（4箱）の遺物洗浄を開始した。1月13日から1月30日までに室内整理作業を実施した。接合（1月中旬）、注記（1月中旬）、実測（1月中旬～1月下旬）、トレース（1月中旬～1月下旬）、写真撮影（2月上旬）、版下作成（2月）、編集作業（2月）を実施し、印刷所へ入稿した。3月19日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

整理作業体制（平成20年度）

作業期間	平成21年1月9日～平成21年3月19日		
事業主体者	秋田市都市整備部公園課		
調査担当者	秋田市教育委員会文化振興室		
調査体制	文化振興室	室長	石郷岡 誠 一
		参事	赤 川 衛
		室長補佐	加 藤 隆 子
	文化財担当		
		副参事	安 田 忠 市
		主席主査	西 谷 隆 (整理担当)
		主査	進 藤 靖
		主事	鎌 田 英 智
		主事	伊 藤 才 城
業務受託者	株式会社 本郷建設工務所		
	整理作業員	千葉隆樹、岩谷みゆき、今野祥子、岩谷みどり、田原瑞穂	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回の調査対象地である久保田城黒門跡は、JR奥羽本線秋田駅の北西約700mの千秋公園地内東側に位置している（第1図）。北緯39° 43′ 10″、東経140° 7′ 37″（世界測地系：X=-31,078、Y=-60,173）で、現在公園の東側入り口通路となっている（第2図）。

千秋公園は、地形区分では千秋公園台地と呼ばれている（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第3図）。北東約1.3kmに位置している手形山から古旭川（現在の旭川は久保田城築城によって掘り替えられた川）の浸食によって切断されたと考えられる独立丘陵である。標高40m前後であるが、3段の段丘（40m、35m、25m）からなっている。

千秋公園は手形山台地と同様に第四系の礫層や含礫砂層（潟西層）からなり、構成物質は最上部に1～2mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に最大径10cm前後の礫を含む砂層が30cm以上あり、これらがその下部の第三系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）を厚く覆っている。なお、砂礫の部分では所々にクロスラミナがみられ、砂の部分は水平で細かい層理を示している。

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

秋田市教育委員会が作成した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書—改訂版—』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、久保田城跡周辺の遺跡について概観する。

近世の遺跡は、久保田城跡の南西500mに古川堀反町遺跡（1）、南側600mに藩校明德館跡（2）、東根小屋遺跡（3）、また、北東約1.3kmに平田篤胤墓（7）、西約2kmに八橋一里塚（9）、南西約2.1kmに鑄砲所跡（11）、南東約2.1kmに金照寺山一ツ森遺跡（12）がある。

古川堀反町遺跡^(注1)は平成16、17年に秋田中央警察署改築事業に伴う緊急発掘調査が実施され、秋田藩の家老が居住していた武家屋敷跡である。藩校明德館跡は平成13年に市街地再開発事業に伴う緊急発掘調査が実施され、江戸・明治期の遺構（建物跡・溝跡・井戸跡等）とともに近世陶磁器が出土した。東根小屋遺跡^(注3)は平成15、16年に教育・福祉複合施設整備に伴う緊急発掘調査が実施され、秋田藩の上級武士の宅地跡（建物跡、井戸跡等）が発見されている。平田篤胤墓^(注4)（国指定史跡）は国学四大人の一人である平田篤胤（1776～1843）の墓である。八橋一里塚は慶長9年（1604）に江戸日本橋を起点として主要街道の一里ごとに置かれた塚で、八橋一里塚は日本橋から143里である。鑄砲所跡は大砲を鑄造する施設として秋田藩が安政9年（1859）に建てたところである。金照寺山一ツ森遺跡は昭和50年にマイクロウェーブ回線中継所新設に伴い、秋田考古学協会によって緊急発掘調査が実施され、墳丘状盛り土・掘立柱建物跡・溝跡と江戸時代初期の唐津焼の小物、江戸時代中期の七輪などが発見されている。

注1 『古川堀反町遺跡—秋田中央警察署改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県教育委員会 2008年

注2 『秋田市 藩校明德館跡—市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 2002年

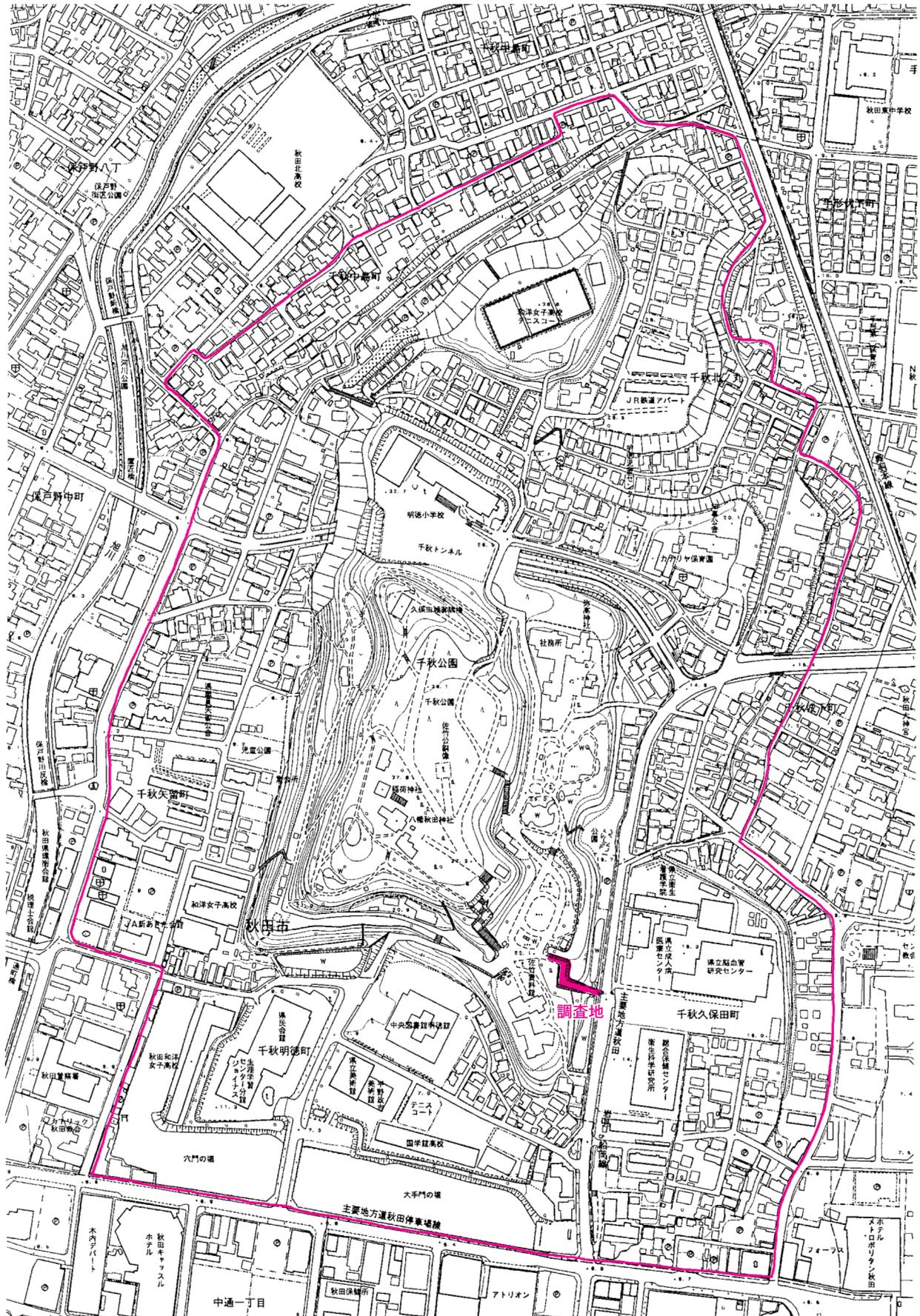
- 注3 『東根小屋遺跡—秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県教育委員会 2005年
- 注4 『秋田県の文化財』 秋田県教育委員会 1989年
- 注5 『秋田市金照寺山一ツ森遺跡発掘調査報告書』 秋田考古学協会 1976年

【参考文献】

- 『秋田市史第三巻 近世通史編』 秋田市 2003年
- 渡部景一 『図説 秋田市歴史地図』 無明舎出版 1984年



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 久保田城跡周辺図 (S=1/5,500)



第3図 地形分類図 (S=1/50,000)



第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	古川堀反町遺跡	武家屋敷跡	秋田市千秋明徳町	近世	建物跡：瓦・銅製品・鉄製品・ガラス製品・近世陶磁器
2	藩校明徳館跡	学校跡	秋田市中通一丁目	近世	掘立柱建物跡・柱列・井戸跡・溝跡・土坑：近世陶磁器
3	東根小屋町遺跡	武家屋敷跡	秋田市中通二丁目	近世	柱列・井戸跡・溝跡・土坑・柱穴：近世陶磁器・土器・木製品・金属製品・銭貨・動物遺体・種実遺体
4	蛇野遺跡	遺物包含地・城館	秋田市広面字蛇野、推子、大沢	縄文・奈良・平安・中世	石器・赤褐色土器
5	柳沢遺跡	集落跡	秋田市広面字柳沢他	縄文	竪穴住居跡・土坑：縄文土器・石器
6	桜田邸内遺跡	遺物包含地	秋田市広面字赤沼	平安	縄文土器片（後期）
7	平田篤胤墓	墓地	秋田市手形字大沢	近世	
8	一ノ坪条里制遺構	条里制遺構	秋田市保戸野八丁、泉一ノ坪他	奈良・平安	条里制遺構
9	八橋一里塚	一里塚	秋田市八橋本町一丁目	近世	
10	鑄砲所跡	遺物包含地	秋田市山王六丁目	平安・近世	赤褐色土器・須恵器・鉄滓
11	鍋子山遺跡	遺物包含地	秋田市川元松丘町	縄文	縄文土器
12	金照寺山一ツ森遺跡	塚	秋田市榎山金照町	近世	墳丘状盛り土・掘立柱建物跡：唐津焼・寛永通宝
13	七ツ森遺跡	塚	秋田市榎山金照町		塚
14	香奇館	城館	秋田市東通明田	中世	帯郭・腰郭

2 久保田城跡の概要

久保田城跡は、秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城跡で、現在の千秋公園一帯がその範囲である。

慶長7年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初安東実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、海岸に近い湊城は狭小の平城であることから、家臣団の居住地の確保と諸施設の建設用地等の収容能力的な問題や、防御的な不安などから新城を築くこととなった。そこで、寺内山と久保田神明山を候補地として、実地検分の結果、仁別川（旭川）を西方に移すことを前提に久保田神明山を選定し、翌年の慶長8年（1603）5月に着工した。神明山には川尻村の肝煎である豪族三浦氏（後の川尻氏）の氏神（後に川尻総社神社）や数件の人家があったが、それぞれを移転させている。そして、城は未完成であったが約1年後の同9年（1604）8月には湊城を破却して新城へ移り、それ以降も継続して城の整備を続けた。

久保田城は本丸・二の丸・三の丸・北の丸からなっている。本丸は東西65間（約117m）、南北120間（約216m）で、藩主の住居である本丸御殿や政務所等が置かれ城の中核となっている。本丸は台地の最も高台に位置し、一面を平らにして外周には土塁を巡らし、土塁の間には4箇所（表門・裏門・帯曲輪門・埋門）と5箇所の切戸口を設けていた。そして、門を除く土塁の上には多聞長屋を建て、多聞長屋のない部分は板塀となっているなど、城内を厳重に守り固めていた。また、北西隅には御隅櫓（新兵具庫）、南西隅には御出書院が置かれていた。

二の丸は東西39間（約70m）、南北240間（約432m）で、諸役所（境目方役所・勘定方役所等）や金蔵・厩等が置かれていた。この二の丸は本丸の正面としての玄関口にあたり、外部からの道はすべてここに集まり、内堀を渡る橋4箇所には門（黒門・松下門・不浄門・土門）を設け、足軽番所を置いて警備していた。黒門の正式名称は『国典類抄』第10巻軍部に正徳3年（1713）秋田藩から幕府への報告文書の中に登城ルートについての記述があり、門を『二ノ丸東御門』と表現していることから、黒門は通称として使用されていたものと推察される。藩政時代には大手門から黒門、黒門から表門が正式な登城ルートであったとされている。

三の丸は二の丸の北・東・南の三方をコの字型に囲んでいる一段低い地区である。二の丸を囲む内堀と町を画する外堀の間にあり、家老級の重臣の屋敷等が置かれていた。三の丸は3つの地域からなっており、二の丸東方で大手門と大手北の門との間の高地を上中城、二の丸南方の低地を下中城、上中城から北へ続く北の丸を山の手という。

北の丸は城域の北端に位置し、二の丸から長橋を渡って北へ進んだところで、柵蔵や大木屋が置かれていた。

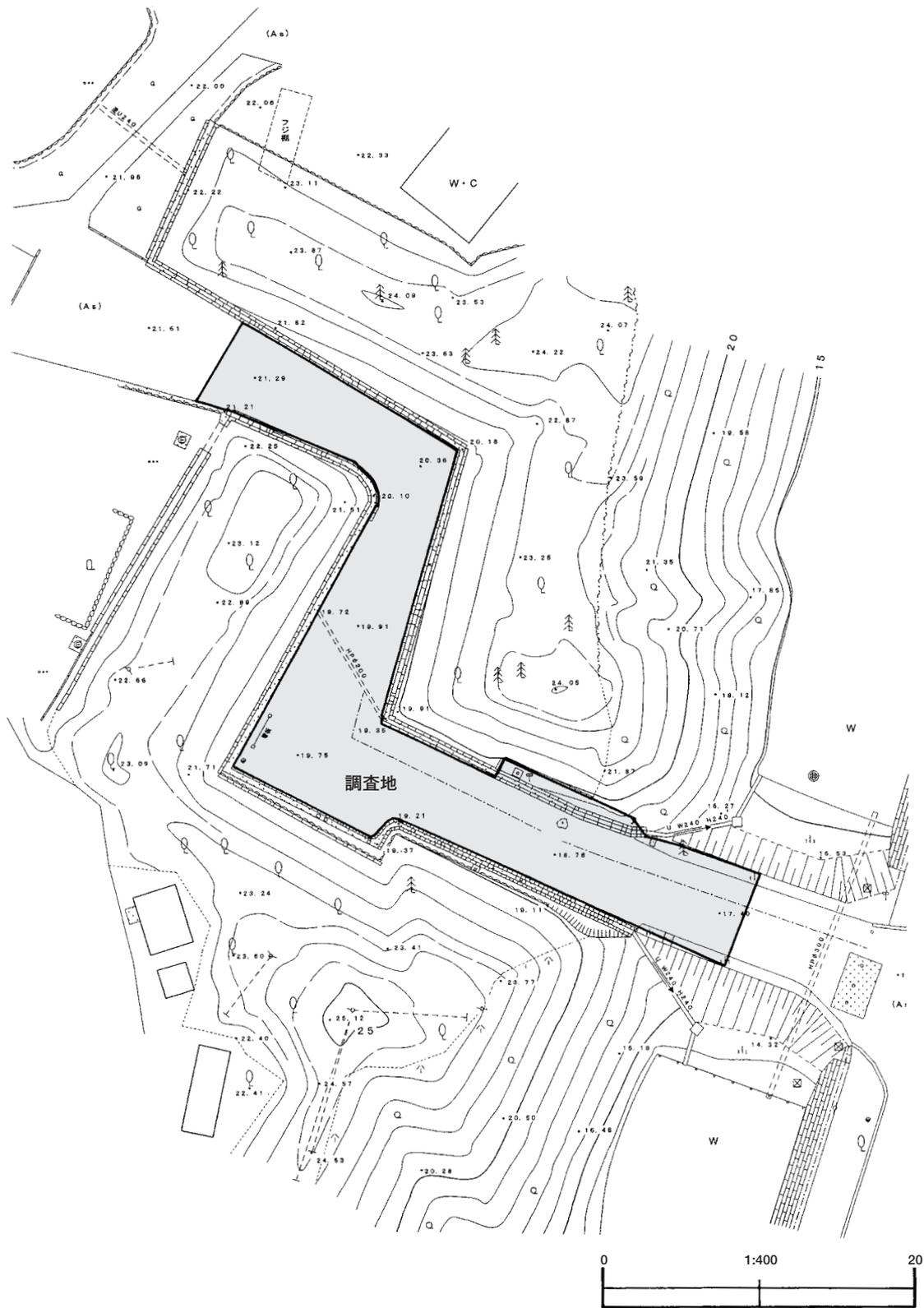
久保田城を取り囲む堀は、本丸と二の丸を内堀で囲み、三の丸や城の正面に位置する家老の洪江家、梅津家屋敷南側、さらに本丸と旭川の間を外堀で囲んでいる。そして、旭川を第三の堀として活用した。東側外堀の東には長沼と呼ばれる湿地が存在していた。

また、久保田城下の町割りについては侍町（内町）、町人町（外町）とに分離し、町人町の西側に寺町を配して整備した。

【引用・参考文献】

秋田市 『秋田市史 第三卷 近世 通史編』 2003年

秋田市教育委員会 『秋田市久保田城跡表門復元に伴う発掘調査報告書-』 2001年



第4図 調査区周辺の地形

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査対象地では平成4年の発掘調査で黒門に関する遺構として、礎石や礎石抜き取り跡が確認されている。平成19年度は4年に調査を実施した部分も含めた園路南側を、平成20年はこれまで調査を実施していなかった園路北側を中心に調査を実施した。

調査区は任意で設定し、調査対象地に一区画4×4mのグリッドを設定した(第7図)。グリッドの南北軸は真北に合せ、グリッド南北軸に直行するグリッド東西軸を設定した。グリッド南北軸に算用数字、グリッド東西軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。また、グリッド杭とは別に、世界測地系に基づいた座標杭を各3点設置した。各座標杭は下記のとおりのとおりである。

A : (X = -30,820.000 Y = -60,710.000)、B : (X = -30,804.000 Y = -60,710.000)

C : (X = -30,820.000 Y = -60,730.000)

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して取り上げた。遺構平面図・断面図・土層断面図は、1/20の縮尺で作成した。遺構写真は35mm版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55cm×34cm×15cmのコンテナで約4箱である。遺物は洗浄・接合・注記・復元作業を行い、実測図を1/1で作成した。遺物写真は35mm版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで撮影した。

第2節 層序

調査区の層序は、下記のとおりである(第6、9図)。

第1層 アスファルト

第2層 碎石、園路舗装時に敷いたもの

第3層 (旧表土) 暗褐色土 (10YR3/4)

第4層 (整地層) 黄褐色粘土 (10YR5/6)

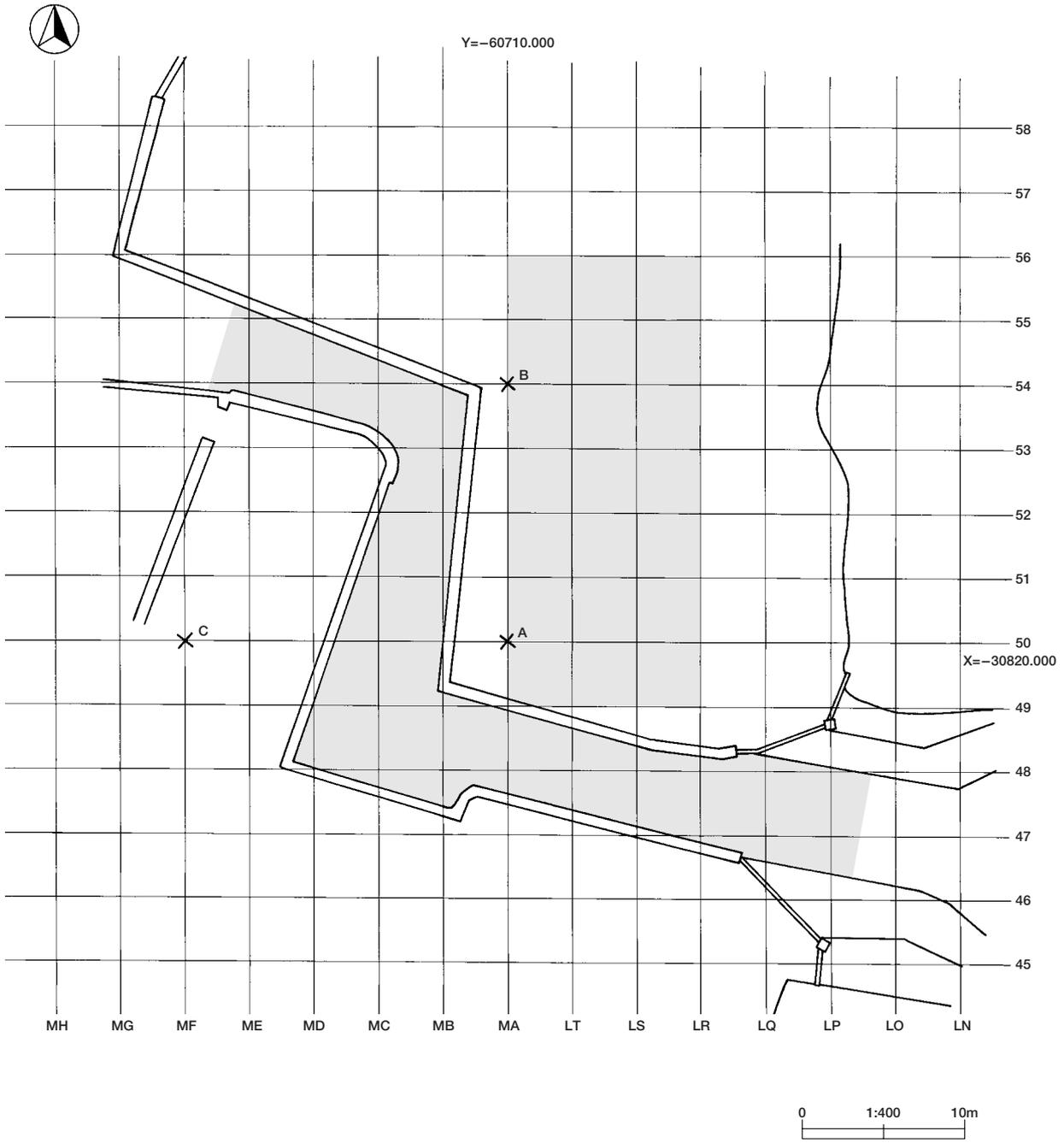
第5層 (整地層) 明黄褐色粘土 (10Y6/8)

第6層 (地山層) 明黄褐色粘土 (2.5Y7/6)

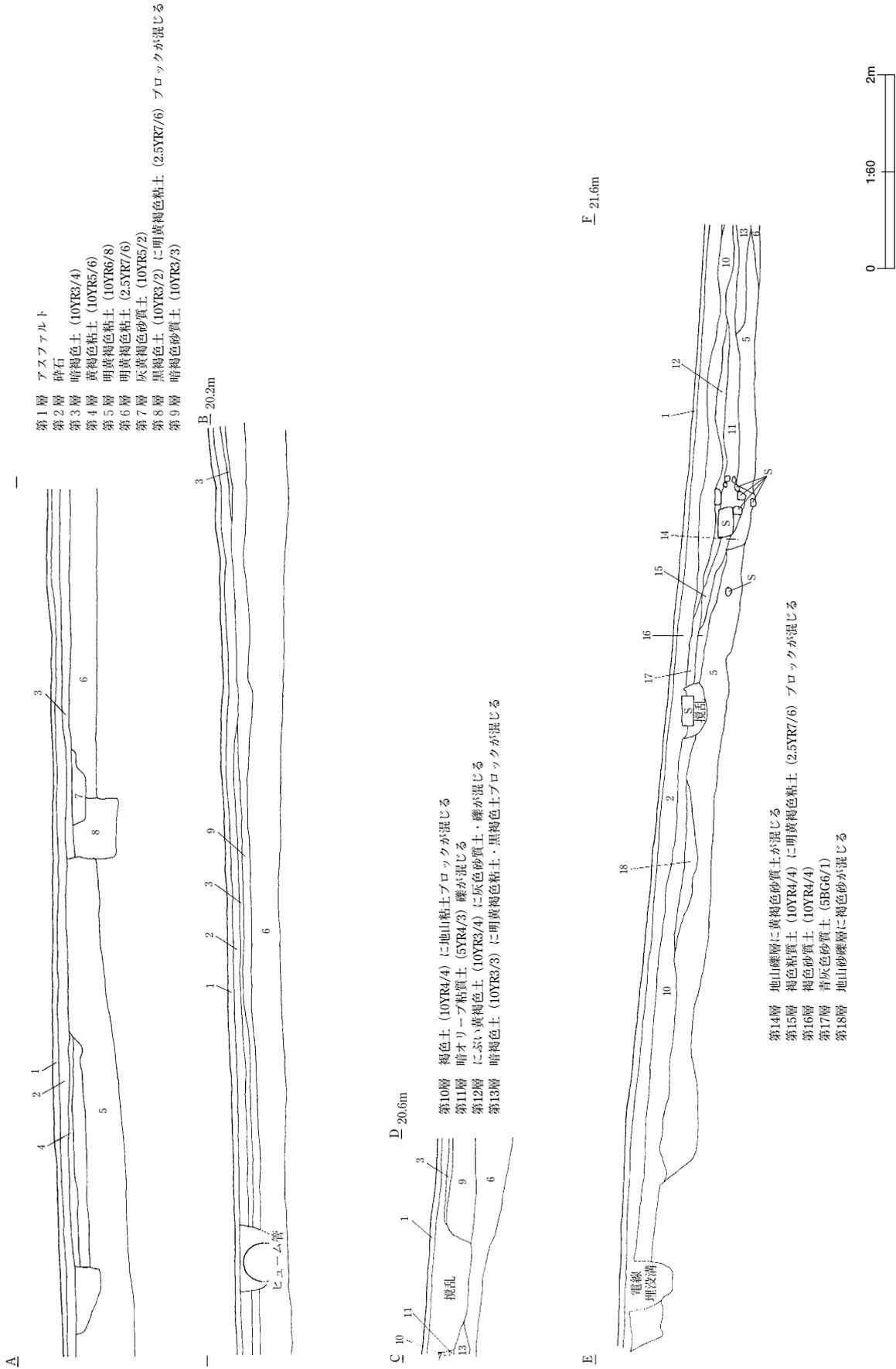
1
2
3
4
5
6

第6図 基本層序
柱状図

園路の二の丸付近(第8図に示すCからFの地点)は場所によって基本層序の中に、7層(灰黄褐色砂質土〔10YR5/2〕)、8層(黒褐色土〔10YR3/2〕に明黄褐色粘土〔2.5YR7/6〕ブロックが混じる)、9層(暗褐色砂質土〔10YR3/3〕)、10層(褐色土〔10YR4/4〕に地山粘土ブロックが混じる)、11層(暗オリーブ粘土〔5YR4/3〕に礫が混じる)、12層(にぶい黄褐色土に灰色砂質土、礫が混じる)、13層(暗褐色土〔10YR3/3〕に明黄褐色砂質土が混じる)、14層(地山礫層に黄褐色砂質土が混じる)、15層(褐色粘質土〔10YR4/4〕に明黄褐色粘土〔2.5YR7/6〕ブロックが混じる)、16層(褐色砂質土〔10YR4/4〕)、17層(青灰色砂質土〔5BG6/1〕)、18層(地山礫層に褐色砂が混じる)が混入している。



第7図 グリッド配置図



第9図 土層断面図

第3節 遺構と遺物

調査区では門跡・柱列・溝跡・唐金橋掘り方等が検出された。

1 門跡（第10～12図、図版4、5）

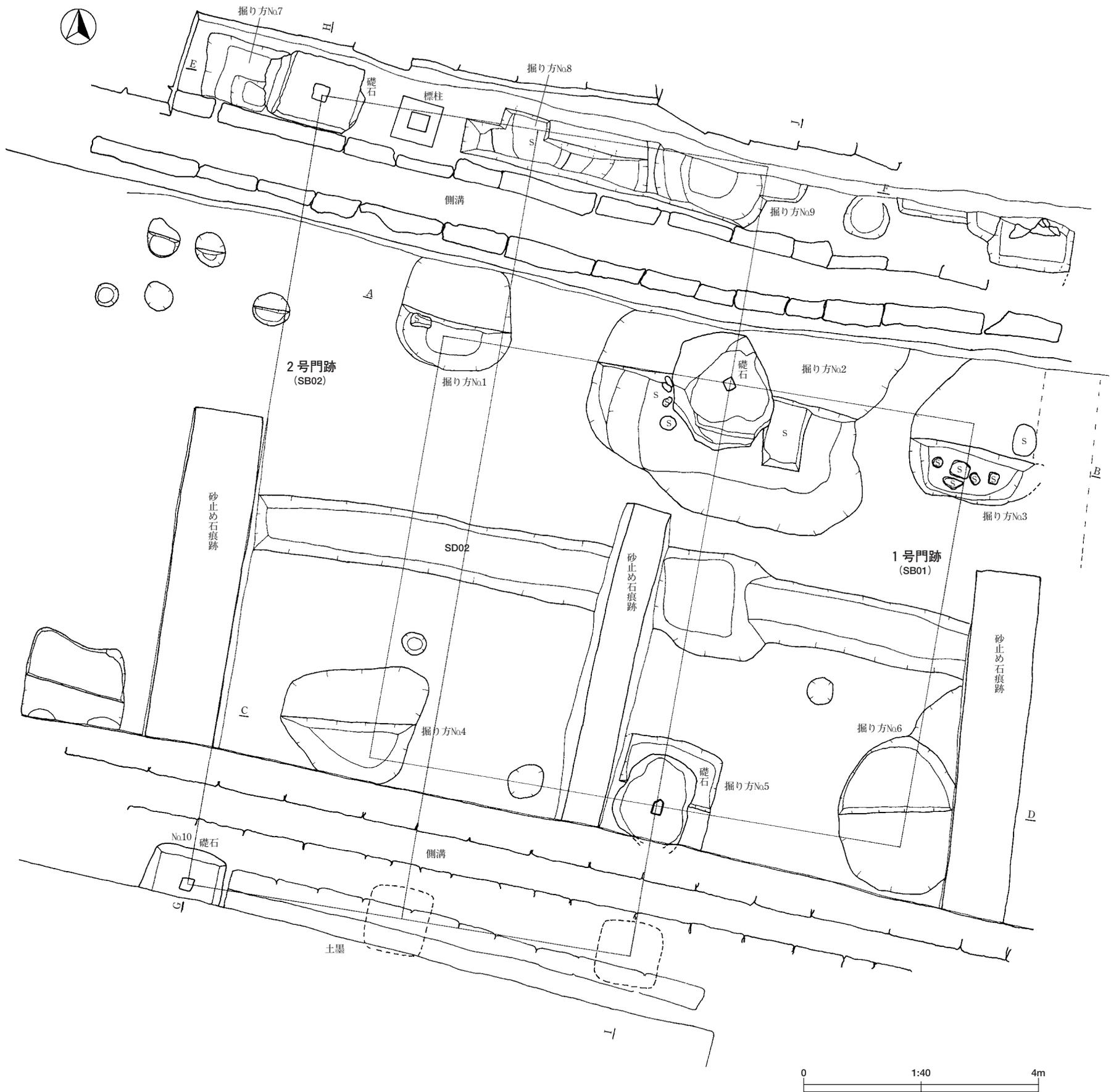
これまで平成4、19年の2回断片的な調査を実施し、礎石・礎石抜き取り穴・柱痕跡等を検出したが、明確な構造等を把握するには至らなかった。今回はこれまでの2回の調査地の再調査と新たに調査区を設定し調査を行い精査した結果、新たな掘り方が検出され門跡の構造がある程度推定され、門は新旧2時期の存在が考えられた。

1号門跡（SB01）

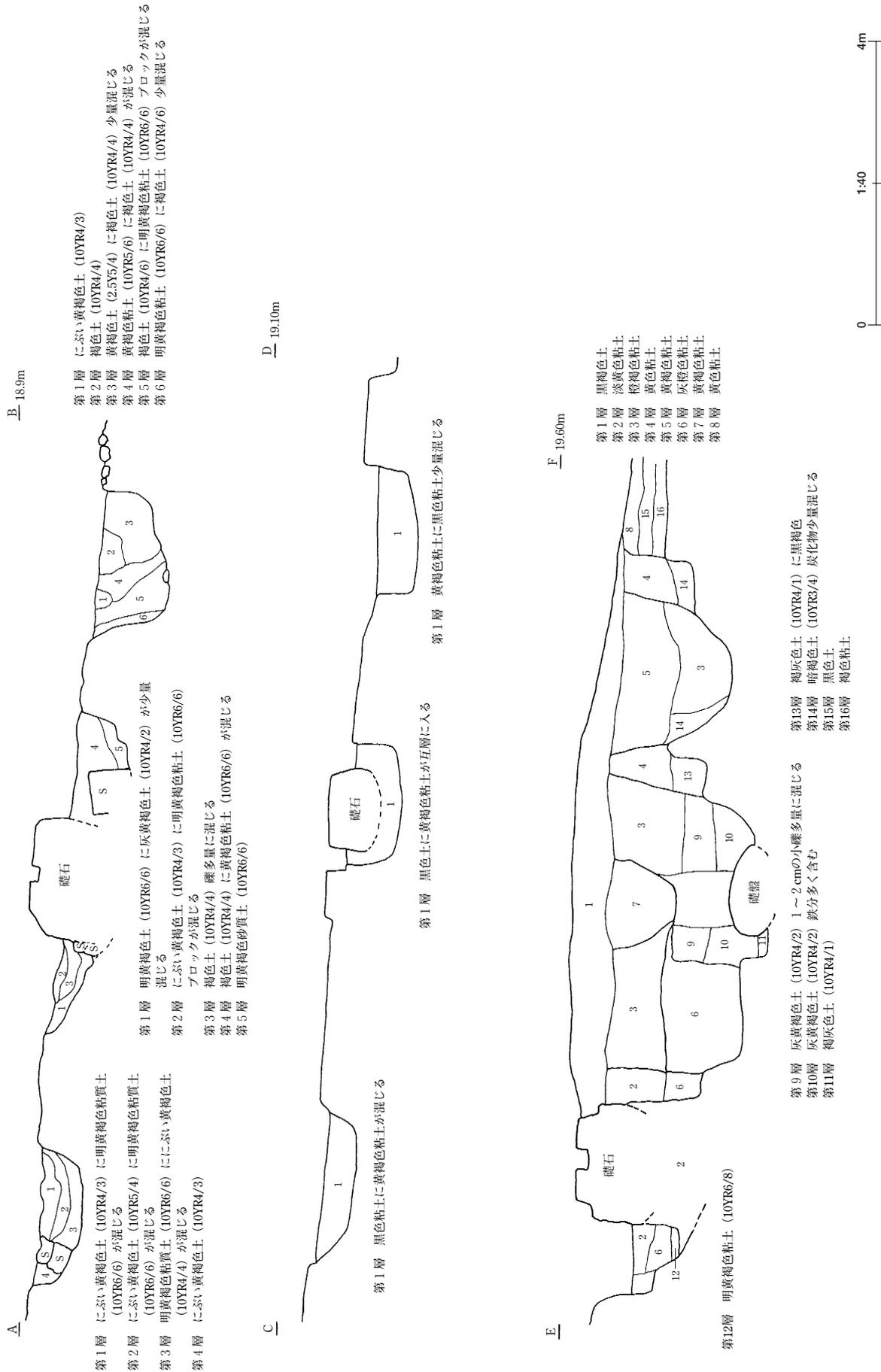
今回調査した園路上で、新たに掘り方4個を検出した。それぞれの掘り方を見ると、No.1掘り方は長軸1m、短軸90cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは30cmである。掘り方埋土西側に1辺18～20cmの方形の礫が混入している。No.3掘り方は長軸1.2m、短軸1m以上の不整形を呈し、確認面からの深さは50cmである。掘り方底部には直径10cm前後の礫が多く確認され、礎石を据えるための根石の一部とも考えられる。また、掘り方東側には砂止め石の栗石が検出されていることから、攪乱を受けていることが判明した。No.4掘り方は長軸1.2m、短軸1mの不整形を呈し、確認面からの深さは20cmである。No.6掘り方は長軸1.3m、短軸1m以上の楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。これら、4個の掘り方を見ると礎石は見られないものの、礎石を据えるために埋め込んだと思われる根石も認められることから、桁行1間（3.6m）×梁間1間（4.6）mの礎石の門跡の可能性も考えられる。この門跡は2号門跡よりも規模が小さく、また、検出面も低いことから、古い時期の門跡と考えられる。さらに本調査地には従来から礎石が2基確認されており、今回の調査で礎石の精査を行ったところ、礎石を据えるための掘り方を2基（No.2、No.5）検出した。No.2掘り方は長軸2.3m、短軸1.6m以上の不整形を呈し、確認面からの深さは50cmである。掘り方上部には100×80cm、厚さ40cm以上の礎石が据えられており、中央部には10×8cm、深さ6cmのほぞ穴が認められる。埋土には一辺30cm、長さ50cm以上の角柱状に加工された石が検出され、また、ガラス片が混入していることから後世に礎石が動かされた可能性が考えられる。No.5掘り方は長軸90cm、短軸80cm以上の方形を呈し、確認面からの深さは33cmである。掘り方上部には80×70cmの礎石が据えられており、中央部には14×8cmのほぞ穴が認められた。これら2基の礎石は新しい時期の2号門跡の礎石の一つであるが、桁行1間×梁間1間の1号門跡の梁間軸線上に位置することから、1号門跡は礎石を据えた桁行1間（3.6m）×梁間2間（東から2.1m+2.5m）の門跡となる可能性も考えられる。

2号門跡（SB02）

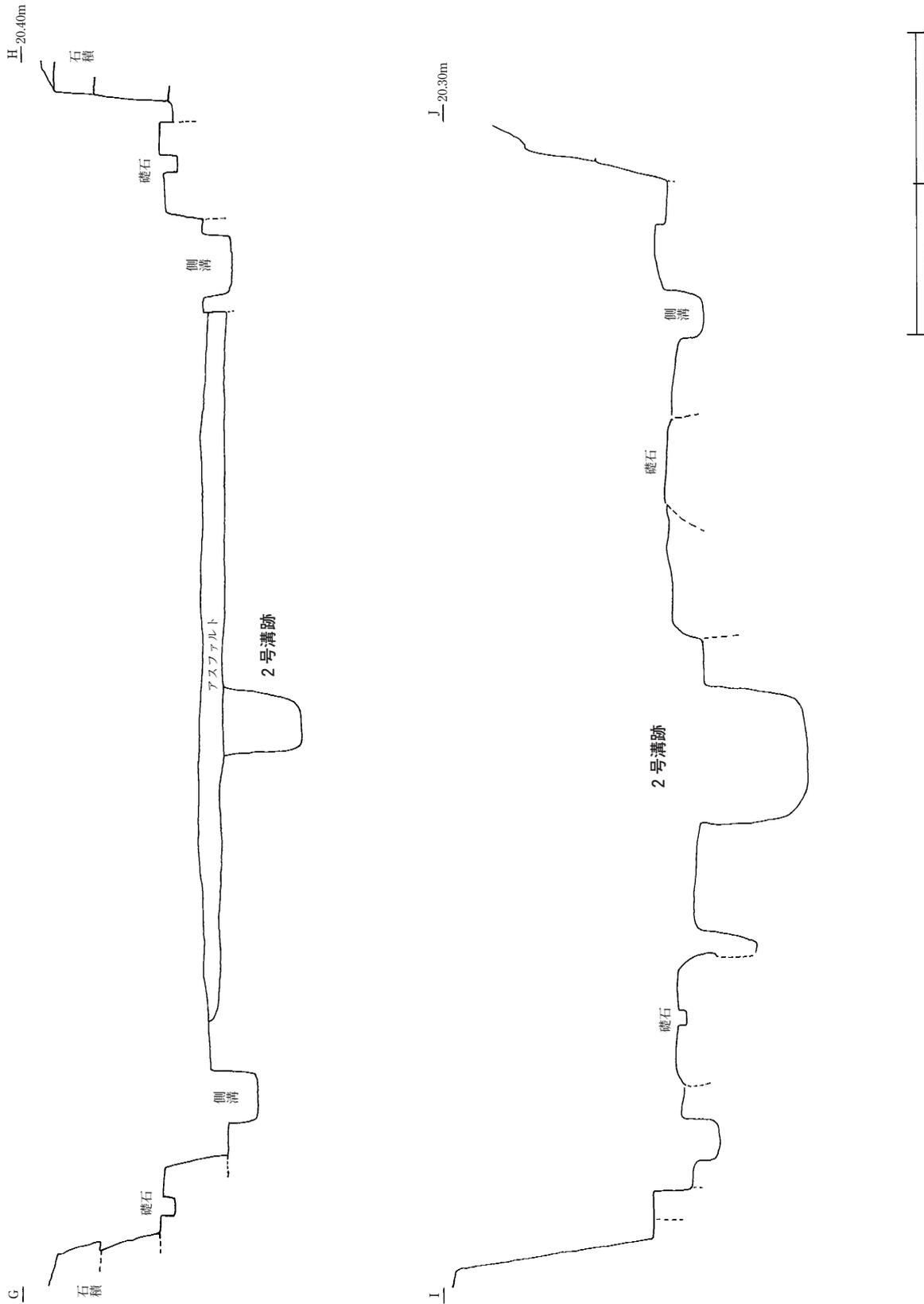
2号門跡については、平成4年時の調査で調査地の園路内に現存する礎石4基のうち、園路上の南北に確認された2基の礎石が、掘り方のプランや断面から黒門に伴う遺構で、南北の土塁直下に従来から確認されていた切石状の2基の礎石については、土層断面の観察から当初の位置ではなく、近・現代に現位置に据えられた黒門の礎石の可能性が高いと判断されていた。また、園路南側に現存する礎石の東西に2基の掘り方が検出され、礎石抜き取りによってプランは明確でないが、掘り方の位置関係や土層観察結果から、これらも黒門に伴う遺構と判断されていた。一方、北側土塁下では2基の柱痕跡が検出



第10図 黒門跡



第11図 黒門跡柱掘り方土層断面



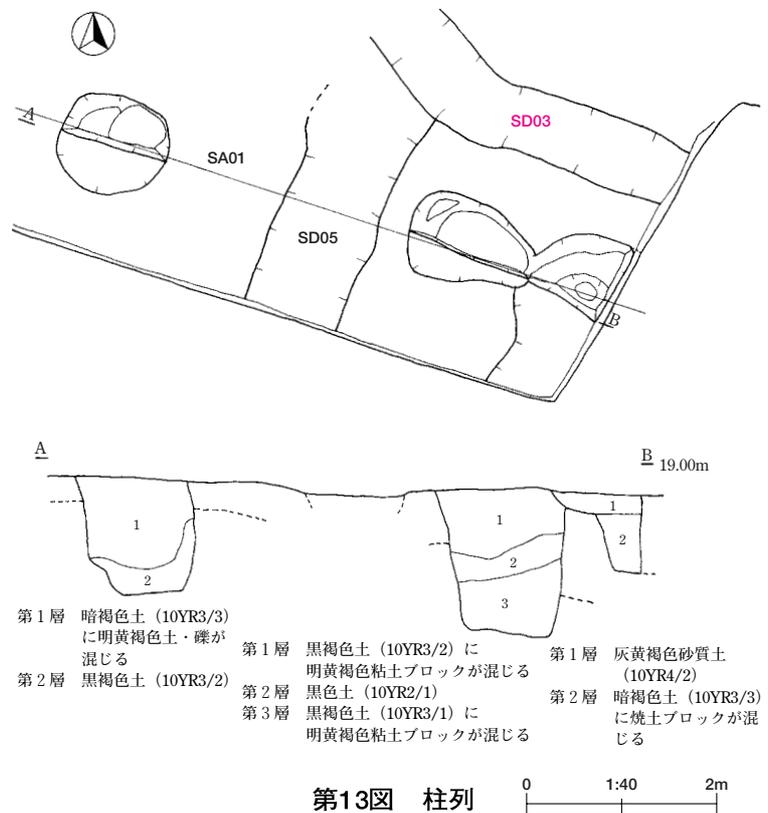
第12図 黒門跡桁行エレベーション図

され、近世遺構の可能性はあるが黒門に直接関係する遺構かは明確でなかったとしている。これらのことから、黒門跡は園路東側を正面とし、梁間2間×桁行2間以上の規模をもつものと推定された。今回の調査では以上の結果を踏まえ、園路西側に位置する平成4年次の調査で現位置に動かされたと考えられた礎石や北側土塁下の再調査を行った。その結果、礎石下部から新たに掘り方No.7が確認された。長軸1.4m以上、短軸0.6m以上の方角を呈し、確認面からの深さは45cmである。据えられている礎石の大きさは一辺60cm、厚さ50cmで中央部には一辺12cm、深さ10cmのほぞ穴が認められる。この掘り方No.7が確認されたことにより礎石は当初からこの位置に据えられていた可能性が高いことが判明した。また、この掘り方No.7の梁間筋に、No.8、9の2基の掘り方が検出された。掘り方No.8は長軸1.3m以上、短軸0.5m以上で確認面からの深さは90cm以上である。底部には径70×40cm以上、厚さ25cmの石製礎盤が据えられていた。掘り方No.9は長軸40cm以上、短軸20cm以上で確認面からの深さは35cmである。この掘り方は西側の楕円形の大きな堀り込みに切られている。一方これらの礎石や掘り方に対応すると思われる南側土塁下には掘り方No.7に据えられている礎石に対応するNo.10礎石が従来から認められており、これに伴う掘り方の検出に努めたが、後世の側溝工事等により削平されており確認できなかった。また南側土塁下ではNO.8、9掘り方に対応する掘り方についても側溝工事等により削平されており確認できなかった。しかし、今回の調査で新たに検出した掘り方と礎石の状況等から門の構造を考えると、桁行3間(1.3m+3.6m+1.9m)×梁間2間(2.0m+1.9m)、背面1間(6.8m)の門になるものと考えられる。

2号門跡は1号門跡(1間×1間、あるいは1間×2間)より規模を大きくしており、現在の園路を南北に大きく拡張して構築されたと考えられ、1号門跡よりは新しい時期が考えられる。

2 柱列 (SA01) (第13図、図版5)

MB~MC-47グリッドで確認された。2基以上の掘り方からなる東西方向の柱列である。柱の方向は西で約20度北に振れる。柱掘り方は直径60cm前後の円形または楕円形を呈し、深さは60~75cmである。柱痕は確認されない。柱間は西から1.9m+…である。

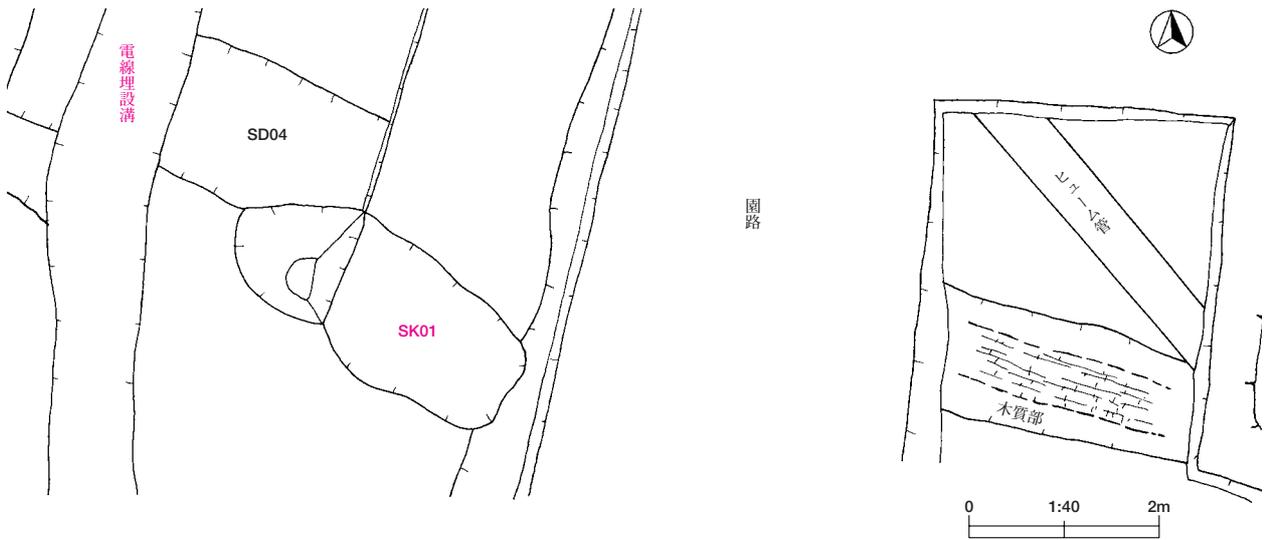


3 溝跡 (第14～16図、図版5)

溝跡は7条検出されたが、このうち1号溝から3号溝は検出状況、切り合い関係等から近代の遺構であり省略する。

4号溝跡 (SD04) (第14図、図版5)

MB～MC-47～48グリッド、第3層面で検出された。東西方向の溝で、長さが園路舗装面を除き2.4m確認され、西側は電線埋設溝で、東側は側溝で切られている。方向は西で約20度北へ振れている。溝の側壁間の幅は60～80cmで、深さは確認面から約15cmで、断面は鍋底状を呈する。東側では底面に厚さ1cmほど桶状の木質部が確認されたが、残存状態は良好でなかった。



第14図 4号溝跡

5号溝跡 (SD05) (第15図、図版6)

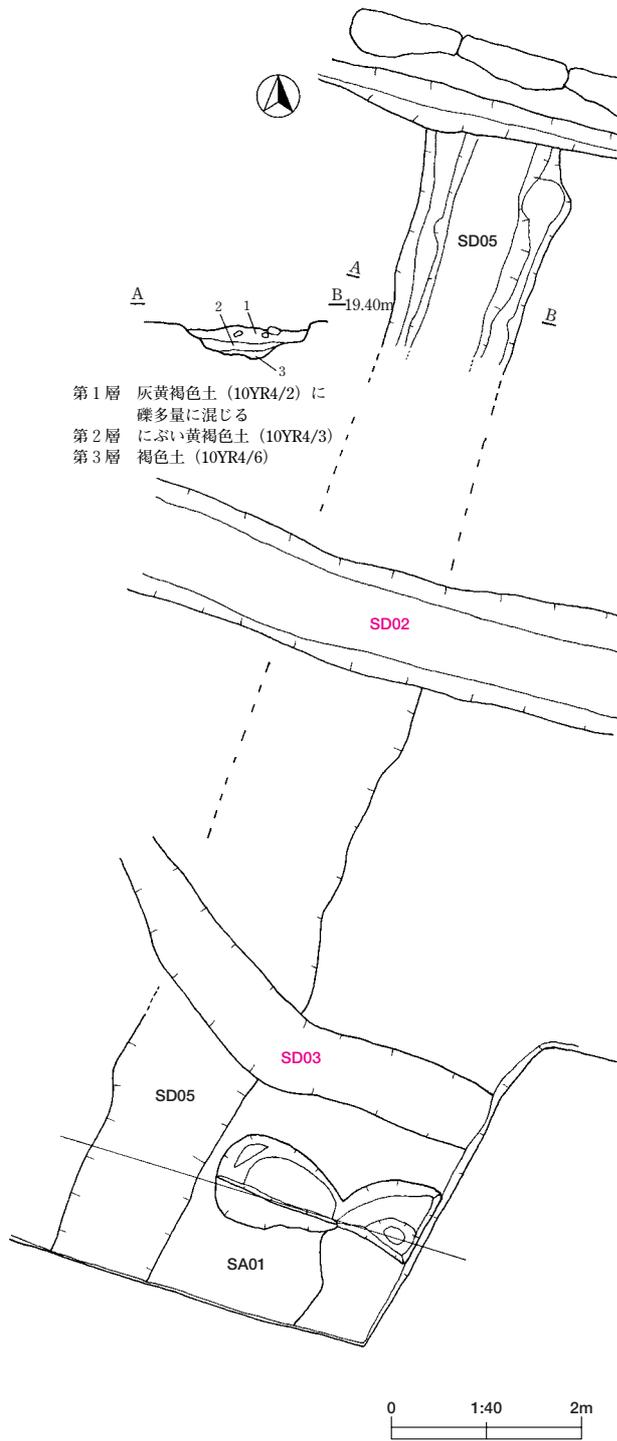
MA～MB-47～49グリッド、第3層面で検出された。南北方向の溝で、中間部が近代の整地や攪乱により途切れているが、全体で長さ6.4mを確認した。方向は北で約14度東へ振れている。溝の側壁間は60～70cmで、深さは確認面から約18cmで、断面は鍋底状を呈する。溝の埋土には直径5～6cmの礫が多く混じっていた。

6号溝跡 (SD06) (第16図、図版6)

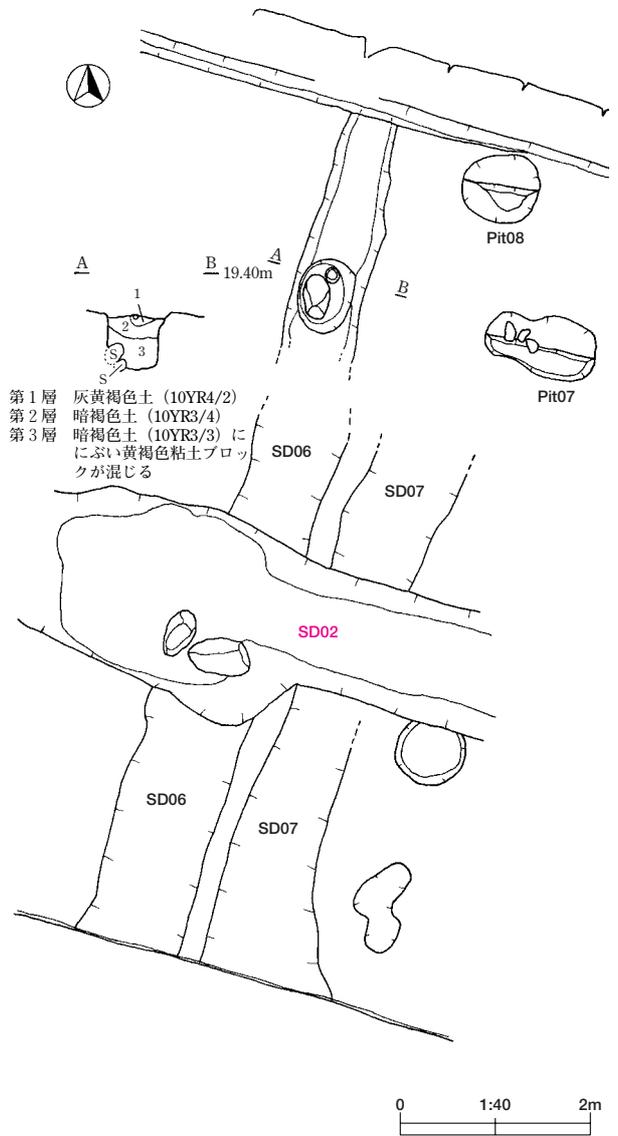
LT～MA-47～48グリッド、第3層面で検出された。南北方向の溝で、全体長さで4.6mを確認した。方向は北で約17度東へ振れている。側壁間は南で50cm、北で30cmである。深さは確認面から約4cmで断面は鍋底状を呈する。

7号溝跡 (SD07) (第16図)

6号溝跡と同様にLT～MA-47～48グリッド、第3層面で検出された。南北方向の溝で、長さ3mを確認した。方向は北で約18度東へ振れている。側壁間は南で70cm、北で40cmである。深さは確認面から約4cmで断面は鍋底状を呈する。



第15図 5号溝跡

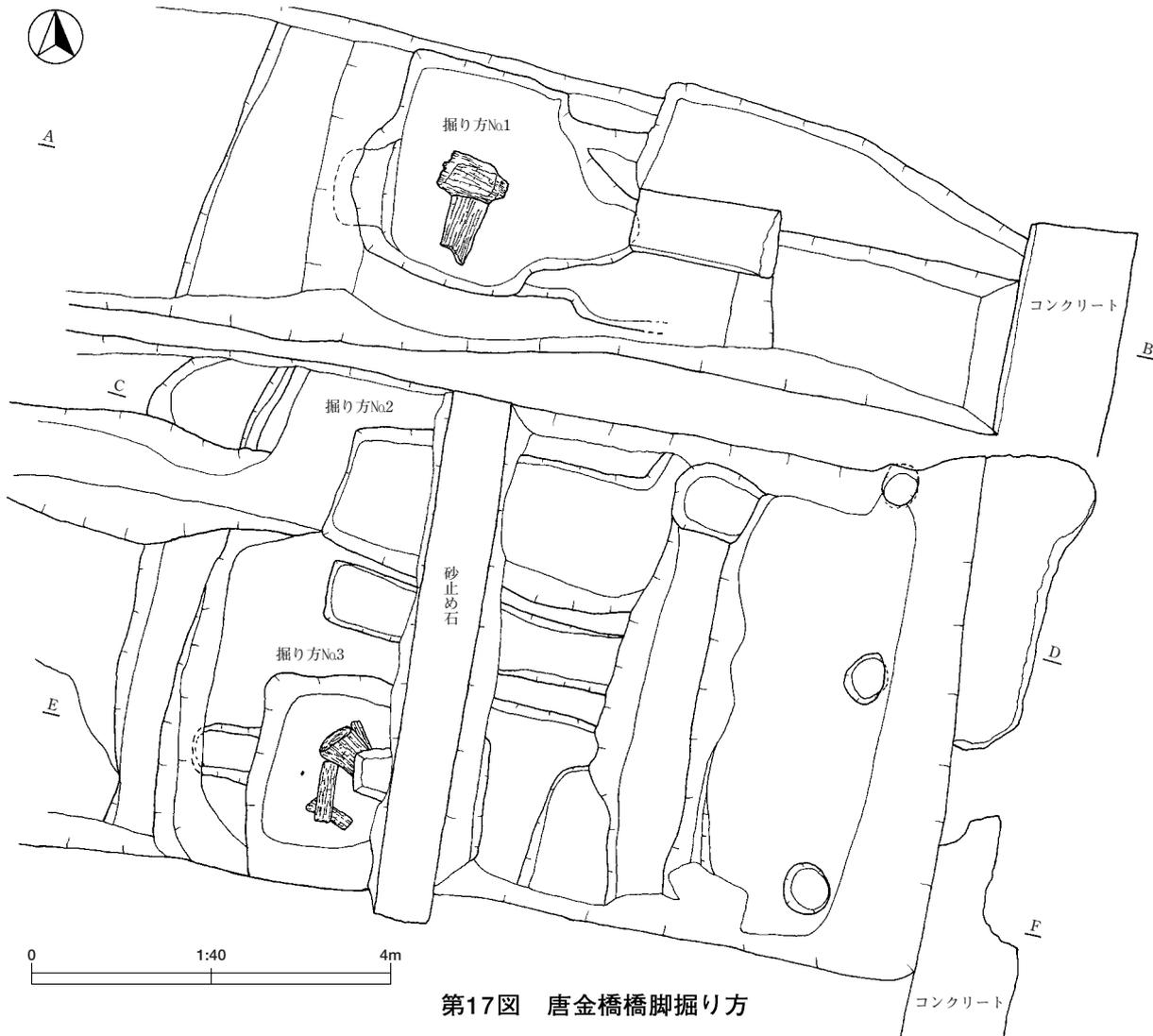


第16図 6・7号溝跡

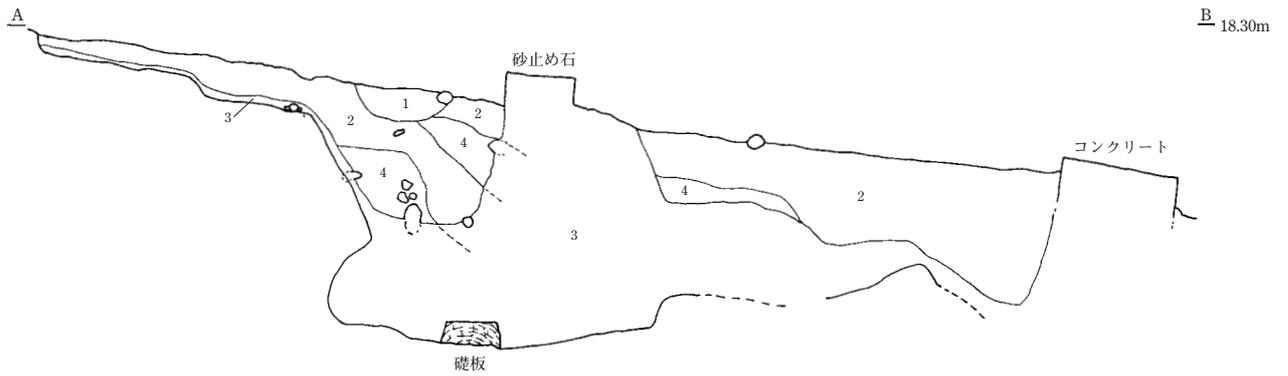
4 唐金橋橋脚掘り方 (第17、18図、図版6)

調査地東側のLQ-16～48グリッドで確認された。この地域は久保田城の三の丸と二の丸の間にある内堀にかかる唐金橋が所在した場所である。平成4年の調査では2基の唐金橋橋脚掘り方を検出しており、今回新たに北側に1基の掘り方を検出した。いずれの掘り方とも上面は後世に堀を埋め、園路を作るために埋められた際の造成土で覆われている。それぞれの掘り方を見ると、No.1掘り方は長軸1.3m、短軸1mの方形を呈し、確認面からの深さは1.2mである。掘り方底部には長さ40cm、幅20cm、厚さ15cmの材と、その下に長さ50cm、幅20cm、厚さ10cmの礎盤状の板を検出した。一方、掘り方内の東西に、この掘り方を幅50cm、奥行き30cmほど下方に向かって斜めに掘り込んだ痕跡が確認された。No.2掘り方は長軸80cm、短軸60cm以上の方形を呈し、確認面からの深さは50cmである。材は確認されなかった。No.3掘り方は長軸1.3m、短軸1.2mの方形を呈し、確認面からの深さは1.1mである。掘り方の底部には長さ30×幅20×厚さ10cmの礎盤状の板を検出した。No.1掘り方と同様に掘り方内の西側この掘り方を幅30cm、奥行き40cmほど下方に向かって斜めに彫り込んだ痕跡が確認された。これら3基の掘り方の中程で東西方向(橋桁方向)横木の痕跡と考えられる方形を呈する空洞が確認された。

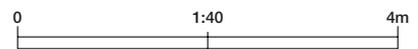
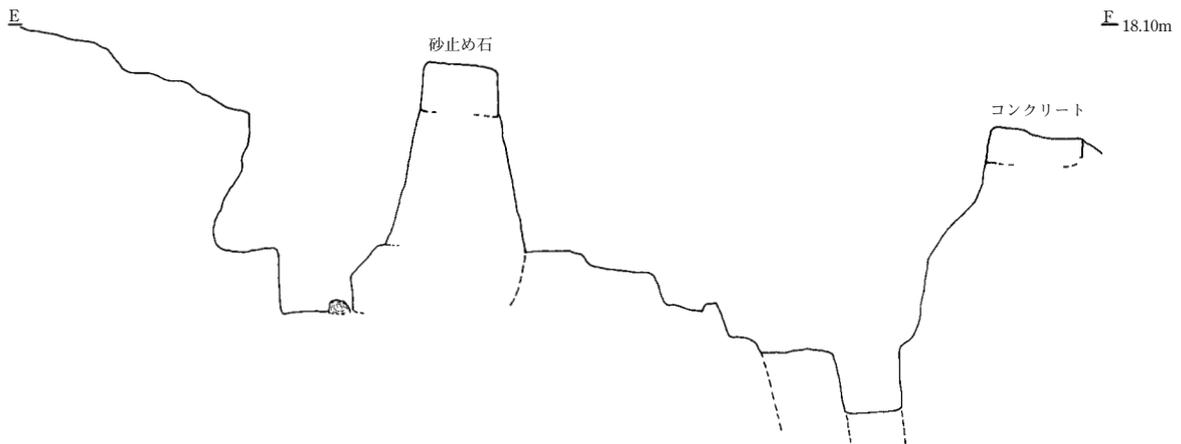
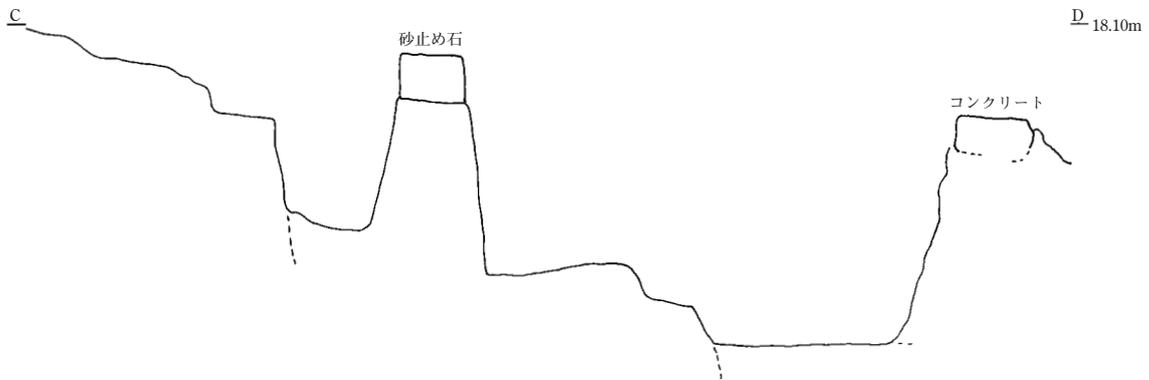
唐金橋掘り方の東端から東方向約1.8mの地点に、堀の南北方向に並ぶ直径25cm、深さ50cm以上の柱痕跡が認められた。柱間隔はほぼ1.2mで、唐金橋の掘り方に並列した形で検出された。堀の護岸部分の土留め杭と考えられる。



第17図 唐金橋橋脚掘り方



- 第1層 暗褐色土 (10YR3/4) にふい黄橙色粘土ブロック少量混じる
- 第2層 にふい黄褐色土 (10YR4/3) に暗褐色粘土ブロック少量混じる
- 第3層 黄褐色砂礫土 (10YR5/6)
- 第4層 灰オリーブ色粘土ブロック (5Y6/2)



第18図 唐金橋橋脚掘り方断面図・エレベーション図

5 出土遺物

調査地の遺構内から遺物の出土はなく、整地層である第3層および内堀埋め立ての際の造成土から遺物が出土した。

第3層出土遺物

陶磁器（第19図1～8、図版7）

〔陶器〕1は陶器である。

（皿類）1は肥前系灰釉陶器皿である。見込み部および高台に砂目積痕がある。

〔磁器〕2～8は磁器である。

（碗類）2、3は産地不明の磁器染付碗である。2の体部外面には草花文、3の体部外面には曲線の文様を染付けている。4は肥前系磁器染付碗である。体部外面下部には草文を染付けている。

5～7は産地不明の磁器碗である。5は体部外面に文様を染付けている。6は体部外面下部に草花状の文様を、内面には二重圏線を染付けている。7は体部内面上部に文様を染付けている。

（蓋類）8は産地不明の磁器染付蓋である、内外面ともに口唇部周辺に格子状に文様を染付けている。

瓦（第21図2、3、図版8）

2は施釉を施した面戸瓦である。3は施釉を施した熨斗瓦である。

造成土出土遺物

陶磁器（第19図9～11、図版7）

〔磁器〕9～11は磁器である

（碗類）9は肥前系磁器染付碗である。体部外面には氷裂文を染付けている。10、11は産地不明の磁器染付碗である。10は体部外面下部に曲線を多用した文様を、11は草花文状の文様を染付けている。

瓦（第21図4、図版8）

4は施釉を施した軒棧瓦である。

攪乱層出土遺物

陶磁器（第21図12、13、図版8）

〔陶器〕12は産地不明の摺鉢である。内外面に茶系の釉薬を施している。

〔磁器〕13は産地不明の磁器染付皿である、見込み部に円と草文状の文様を染付けている。

6 出土遺物属性表および実測図

表2～3、第19図～21図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表2～3の凡例は下記のとおりである。

凡例

- 1 陶磁器・瓦の基本分類ごとに番号を付与した。
- 2 図番号は、実測図の番号と一致している

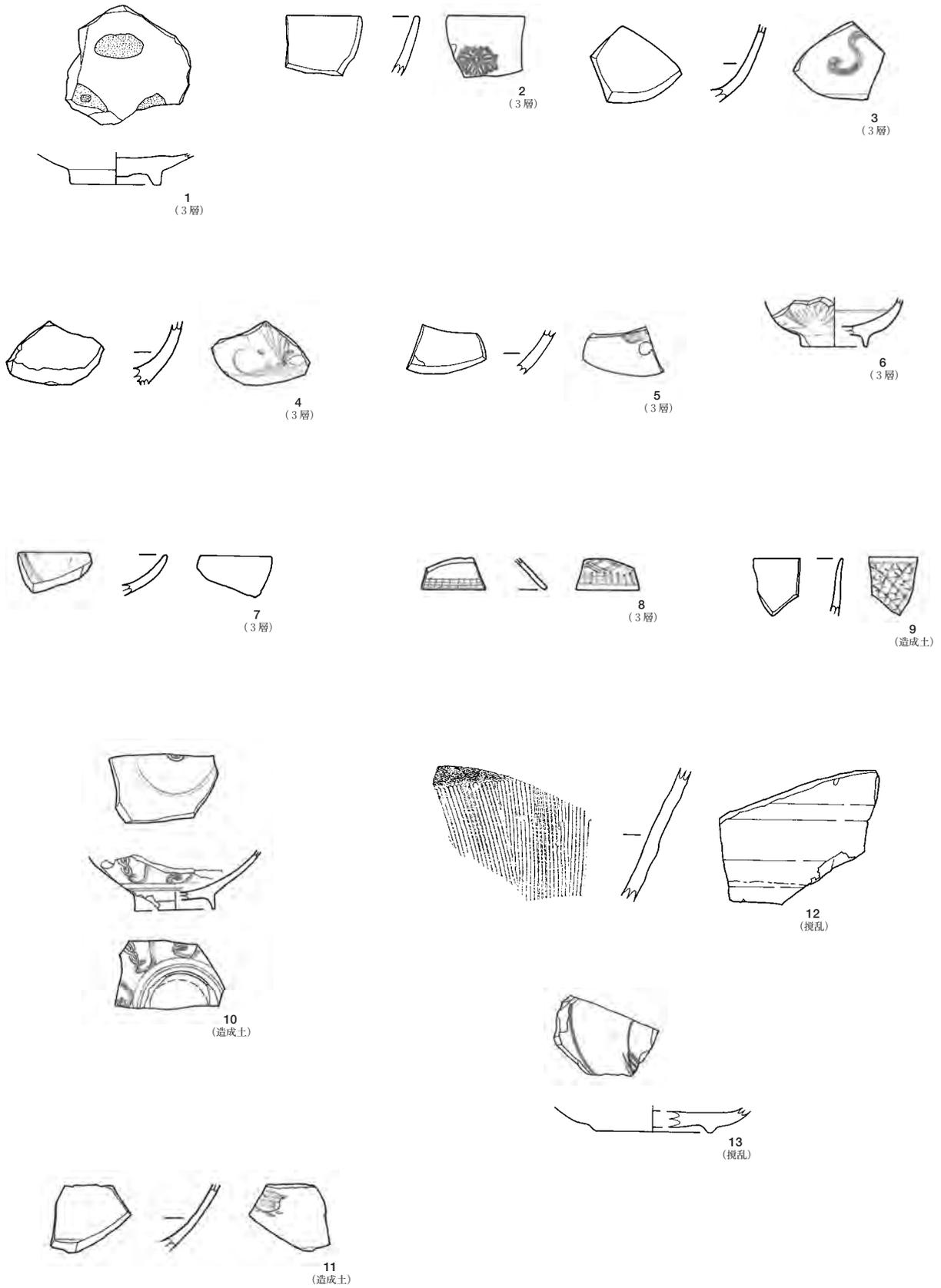
- 3 陶磁器について、分類では陶器・磁器に分類を行った。また、施釉や絵付けにより、染付・青磁等の細分が可能であり、「特徴」欄に記載した。
- 4 陶磁器では、国内産については肥前系、主要な大規模生産地（地方）に関し、その生産地産のものを主として、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯のものも含め「系」として示した。

表2 陶磁器属性一覧

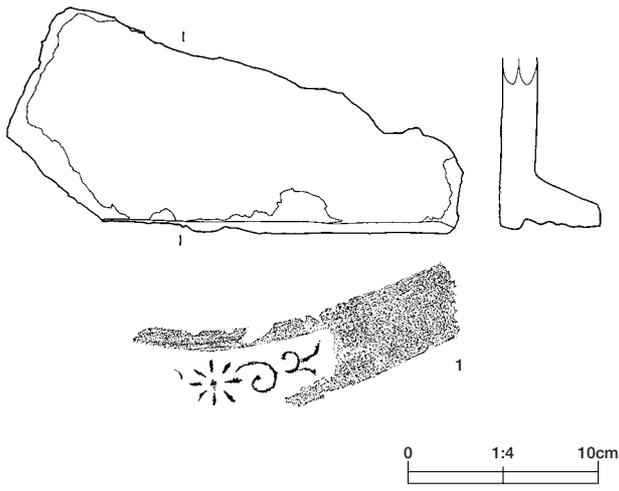
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
1	第19図	3層	MB～MC-49～51	陶器	皿	肥前系	17世紀中期	灰釉
2	第19図	3層	MB-52	磁器	碗	不明	不明	染付
3	第19図	3層	MC-50	磁器	碗	不明	不明	染付
4	第19図	3層	MB～MC-49～51	磁器	碗	肥前系	17世紀後期～ 18世紀中期	染付、草文
5	第19図	3層	MB～MC-49～51	磁器	碗	不明	不明	染付
6	第19図	3層	MB～MC-49～51	磁器	碗	不明	不明	染付
7	第19図	3層	MC-49	磁器	皿	不明	不明	染付
8	第19図	3層	MC-50	陶器	蓋	不明	不明	染付
9	第19図	造成土	LQ47～49	陶器	碗	肥前系	18世紀後期～ 19世紀前期	染付、氷裂文
10	第19図	造成土	LP～LQ47	磁器	碗	不明	不明	染付
11	第19図	造成土	LT-52	磁器	碗	不明	不明	染付
12	第19図	攪乱	LQ～LS-47～48	陶器	播鉢	在地系か	不明	鉄釉
13	第19図	攪乱	LQ～LS-47～48	磁器	皿	不明	不明	染付

表3 瓦属性一覧

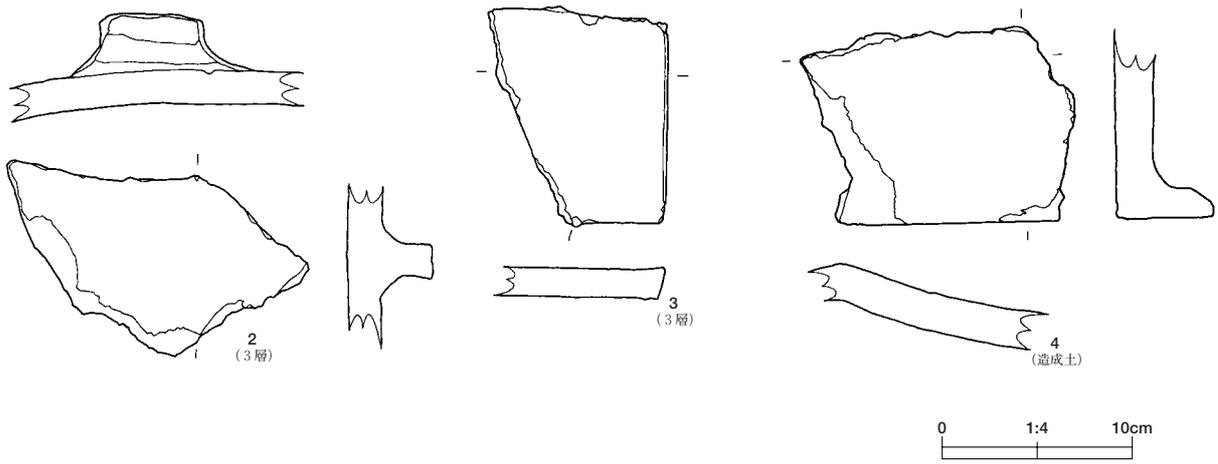
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類
1	第20図	SD02埋土	MB-48	軒棧瓦（釉瓦）、唐草文
2	第21図	3層	MB～MC-49～50	面戸瓦（釉瓦）
3	第21図	3層	MC-49	熨斗（釉瓦）
4	第21図	造成土	LP～LQ-47	軒棧瓦（釉瓦）



第19図 遺構外出土遺物



第20図 遺構内出土瓦



第21図 遺構外出土瓦

第4章 まとめ

久保田城跡は、現在千秋公園として市民の憩いの場として親しまれている。

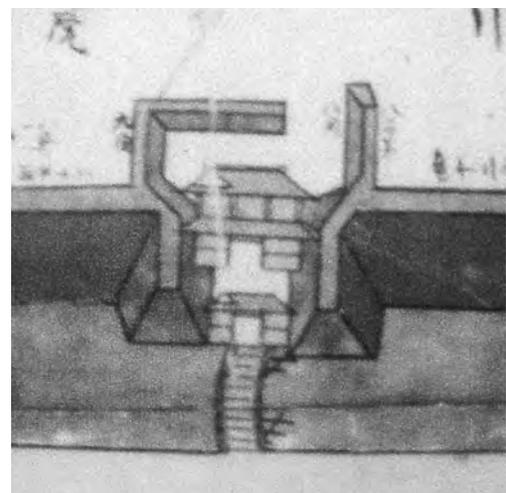
これまでの久保田城跡の発掘調査は、昭和63年度に御隅櫓復元に伴う発掘調査、平成3年度に佐竹史料館増築に伴う発掘調査^(注2)、平成4年度に黒門復元に伴う発掘調査、さらに平成9、12年度に表門復元に伴う発掘調査^(注4)を実施している。

黒門跡の発掘調査はこれまで2回の断片的な調査を実施し、平成4年には園路南側部分の調査を実施し、園路上にある2基の礎石と礎石の東西に検出された掘り方が黒門に伴う遺構と判断されており、黒門は梁間2間×桁行2間以上の規模をもつものと考えられた。また、従来から南北の土塁下に確認されていた切石状の礎石は、近・現代に現位置に据えられた黒門の礎石の可能性が高いと考えられていた。

今回の調査では園路北側に調査区を設定し調査した結果、新たな掘り方が検出され黒門跡については新旧2時期の存在が考えられる。1号門跡(SB01)とした1期目の門は園路上で検出された礎石が抜き取られたと思われる4基の掘り方で構成され、桁行1間(3.6m)×梁間1間(4.6m)の四脚門と考えられ、掘り方には礎石を据えるために埋め込んだ根石が認められる。2号門跡(SB02)よりも規模が小さく、また検出面も低いことから古い時期の門と考えられる。また、従来から園路の南北に据えられていた2基の礎石は新しい時期の2号門跡の礎石であるが、先に述べた1号門跡の梁間軸線上に礎石が位置していることから、桁行1間(3.6m)×梁間2間(2.1m+2.5m)の門となる可能性も考えられる。2号門跡とした2期目の門は、従来から南・北側土塁下に確認されていた切石状の礎石が前述したように近・現代に据えられたものではあるが黒門の礎石の可能性が高いと考えられており、今回の北側再調査により礎石下部より新たに掘り方No.7が検出されたことにより、この礎石は当初からこの位置に据えられていたものであると考えられる。また、礎石が据えられた掘り方の梁間筋方向に新たに掘り方No.8とNo.9の2基の掘り方が検出され、掘り方No.8の底部から径70cm×40cm以上、厚さ25cmの礎盤が検出された。そして、以前から園路上の東に露出していた2基の礎石も、この2号門跡に伴うものである。以上の調査結果により、2期目の門である2号門跡は東側を正面とする桁行3間(1.3m+3.6m+1.9m)×梁間2間(2.0m+1.9m)×背面1間(6.8m)の規模で、通路を拡幅して1期目の門よりも規模を大きくした門と考えられる。

平成9、12年度の2回にわたる表門(一の門)の調査では2期の門が確認され、1期目は慶長8年(1603)から翌年にかけて久保田城を築城した際に建てられた古御門^(注5)と考えられる桁行1間×梁間2間の掘立柱の四脚門である。2期目は1期の門の規模を大きくして礎石の門に作り替えた門で、正面3間×梁間2間×背面1間のものである。梁間中間部の掘り方には確認面から1.4m下部に径80~90cm、厚さ20cmの楕円形の礎石を据えていたことなどから、今回調査を行った黒門跡も類似する形態と考えられる。

黒門の形態や構造についてはさまざまな絵図に示されており、2つの門が直列する絵図^(注6)、枅形門として描いている絵図^(注7)、



(秋田県公文書館蔵)

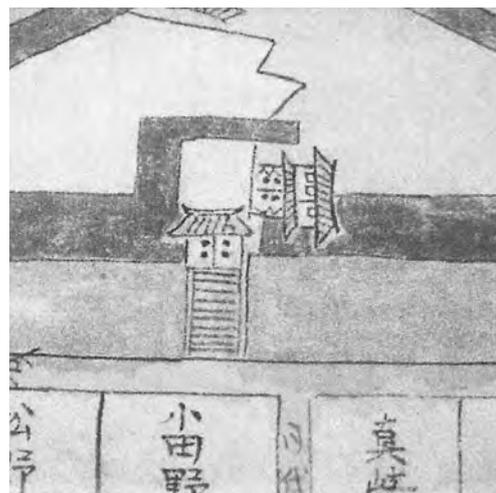
御城下絵図

1つの門を描いている絵図が存在するが、明確な門の形態や構造を示す文献はない。僅かに二の丸東御門という正式な呼称や幕府御国目付一行が登城した際の記載があり、^(注8)「黒門」、^(注9)「黒御門」の通称が記載されるだけで詳細については不明である。これまでの黒門跡発掘調査では梁間2間×桁行2間以上の規模の門と近・現代に現位置に据えられた礎石が黒門の遺構と考えられていたが、今回の調査によって現存する礎石を使用した新旧2時期の門が存在したこと、新しい2号門跡は園路幅を拡幅して建てられていたこと、さらに2号門跡の梁間掘り方底部には本丸表門の掘り方に類似して底部に礎石を据えていたことなどこれまで不明であった黒門の状況が把握できた。

黒門前面の内堀にかけられた唐金橋橋脚の掘り方が現園路の下約1mから3基検出された。このうち南北の掘り方（掘り方No.1、No.3）には橋脚の基礎部を斜め方向から固定する材を据えるために掘られたと考えられる痕跡や、東西方向（橋桁方向）に横木の痕跡と考えられる空洞が検出され、その状況からこの掘り方は唐金橋橋脚の一部と考えられる。

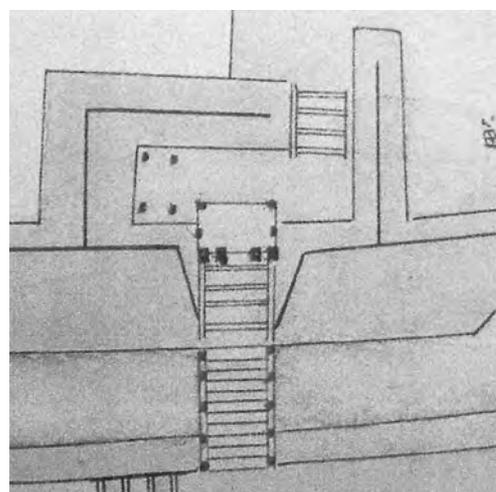
出土遺物については整地層である第3層を主体に数点の遺物が出土しているが、門の構築年代に関する資料は出土していない。

今回の黒門跡発掘調査により黒門周辺の状況が明確になり、久保田城跡の様子がすこしずつ解明されてきたものと思われる。



(秋田県立図書館蔵)

羽州久保田城大絵図



(秋田県立図書館蔵)

旧秋田城郭絵図

注1 納谷信宏『久保田城跡—御隅櫓跡発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 1989年

注2 納谷信宏『久保田城跡—佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 1992年

注3 安田忠市『久保田城跡—表門復元に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 1997年

注4 安田忠市ほか『久保田城跡—表門復元に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 2001年

注5 梅津政景日記の元和5年（1619）の5月条（「おもて御門柱ほそく候共、急度立申候て、古御門をいたゝませ指置可申由、御意之段」）東京大学史料編纂所 岩波書店 1996年

注6 秋田県公文書館蔵「御城下絵図」寛保2年（1742）など多数

注7 秋田県立図書館蔵「羽州久保田城大絵図」文政末期（1830頃）

注8 秋田県立図書館蔵「旧秋田城郭絵図」明治以降

注9 秋田県公文書館蔵「石井忠運日記・別冊・全」宝暦9年

〔第3、4章 引用・参考文献〕

江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001年

大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 2000年

小野正敏「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71-88 1982年

九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』2000年

古泉弘『江戸の考古学』ニューサイエンス社 1987年

小松正夫・日野久『寺内焼窯跡—寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査—』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所 1991年

利部修『久保田城跡・藩校明德館跡—秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第412集 秋田県埋蔵文化財センター 2006年

利部修他『東根小屋町遺跡—秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県埋蔵文化財センター 2005年

鋤柄俊夫他『大阪城跡の発掘調査4』大阪城発掘調査概要7 財団法人 大阪文化センター 1994年

續伸一郎「〔3〕中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.485-501 1995年

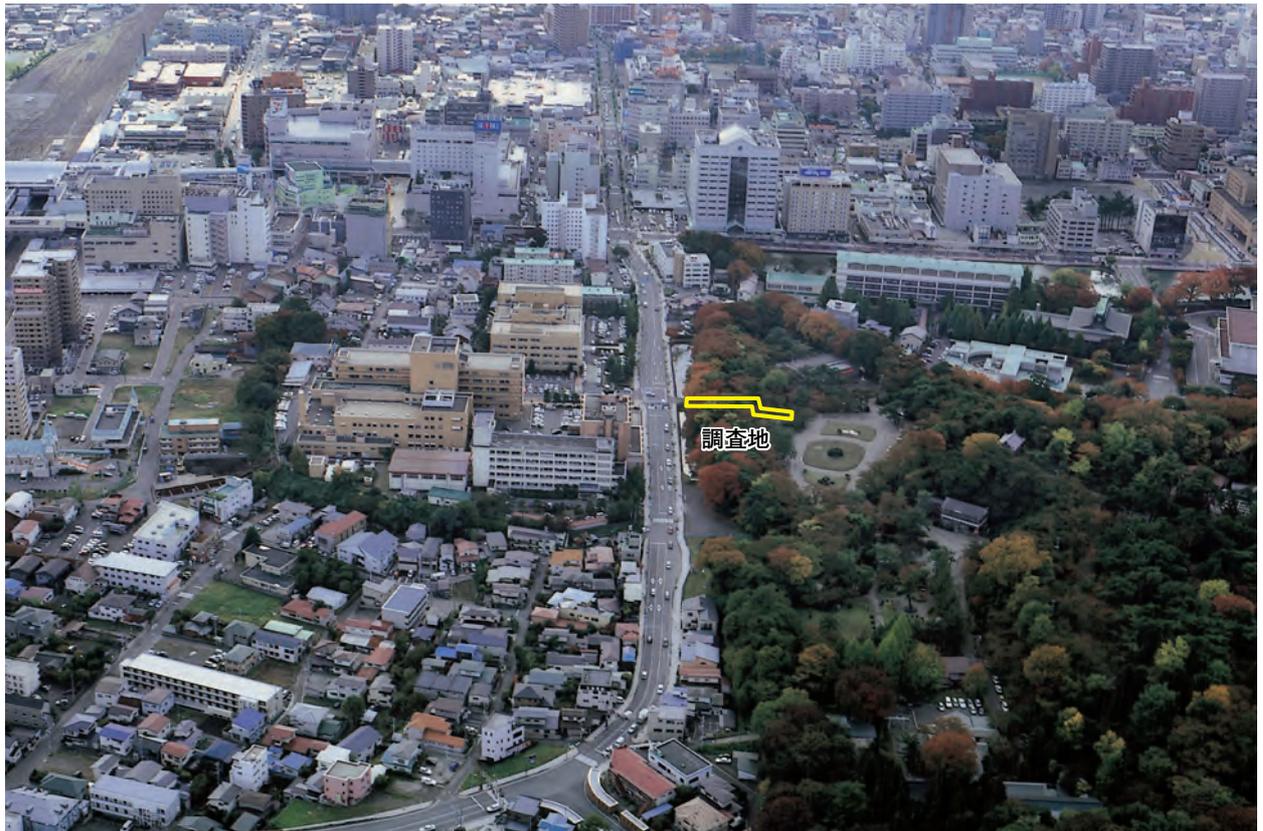
東北陶磁文化館編『東北の近世陶磁』1987年

安田忠市『久保田城跡跡—表門復元に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 1997年

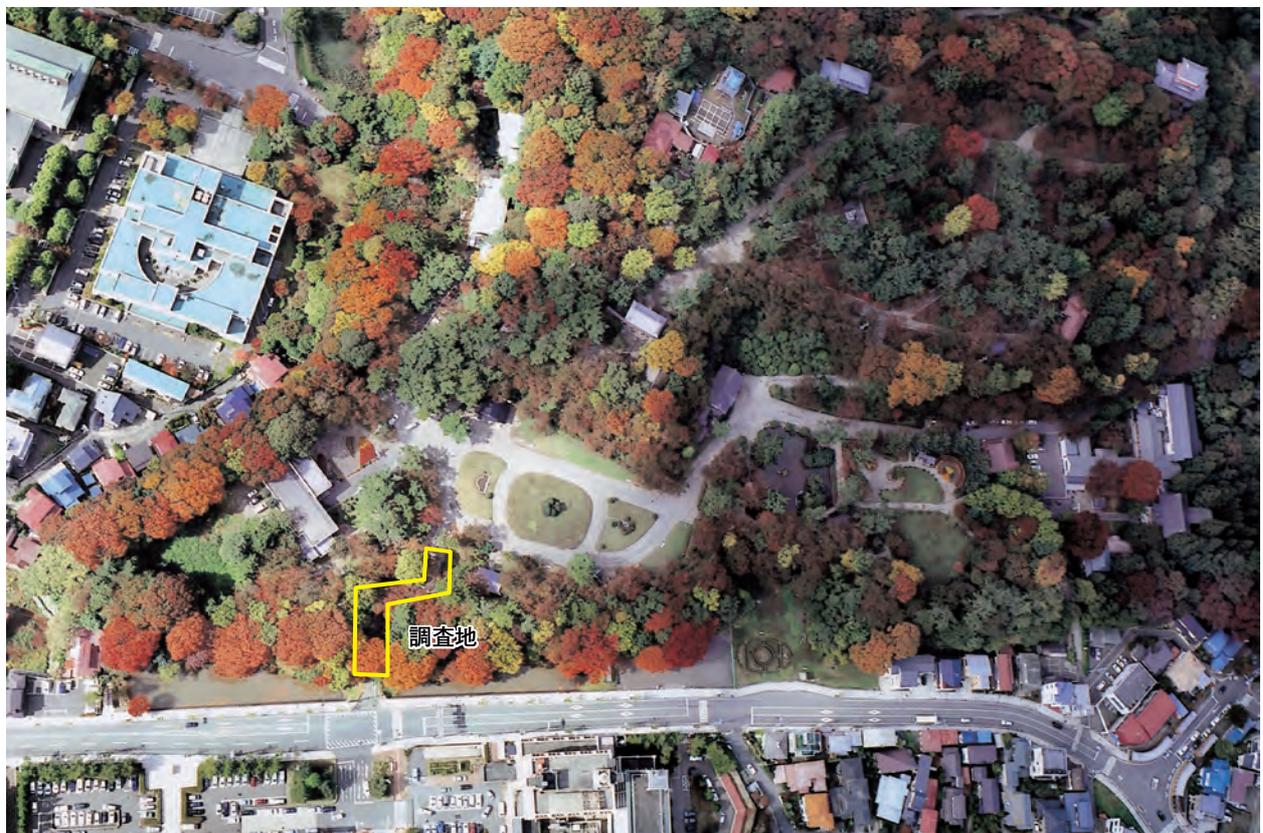
安田忠市『久保田城跡跡—表門復元に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 2001年

安田忠市他『藩校明德館跡—市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会 2002年

写真図版



久保田城黒門跡遠景（北から）



久保田城黒門跡



調査地全景（平成4年度調査）



黒門跡掘り方（西から）



調査地全景（東から、平成4年時調査）



黒門跡南側掘り方（東から）



調査地南側全景（平成19年度調査）



調査地全景（平成20年度調査、西から）



調査地中央部全景（平成19年度調査、南から）



調査地西側全景（平成19年度調査、東から）



黒門跡南側梁間全景（南から）



黒門跡梁間西側掘り方断面（南から）



黒門跡梁間中央掘り方断面（北から）



黒門跡梁間東側掘り方断面（北から）



黒門跡梁間掘り方検出状況



黒門跡北側梁間掘り方全景（東から）



黒門跡北側梁間西側掘り方断面（南から）



黒門跡北側梁間中央部掘り方断面（南から）①



黒門跡北側梁間中央部掘り方断面（南から）②



黒門跡北側梁間東側掘り方断面（南から）



北側土塁下部掘り方断面（南から）



1号柱列東側断面（北から）



1号柱列西側断面（北から）



4号溝跡木質部



5号溝跡断面



6号溝跡



唐金橋橋脚北側掘り方 (南から)



唐金橋橋脚北側掘り方



唐金橋橋脚南側掘り方内検出木質部



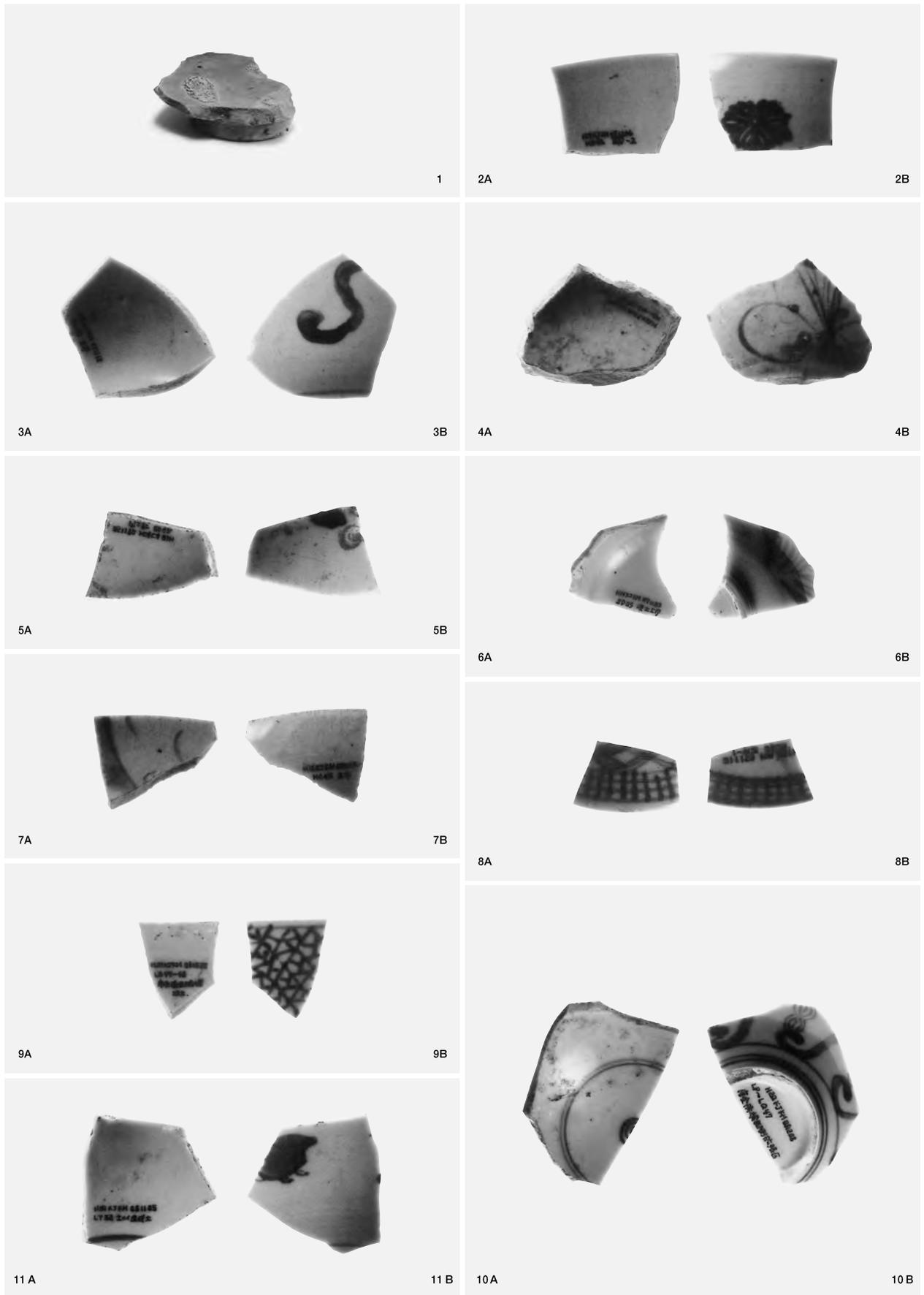
北側土塁第1トレンチ全景 (北から)



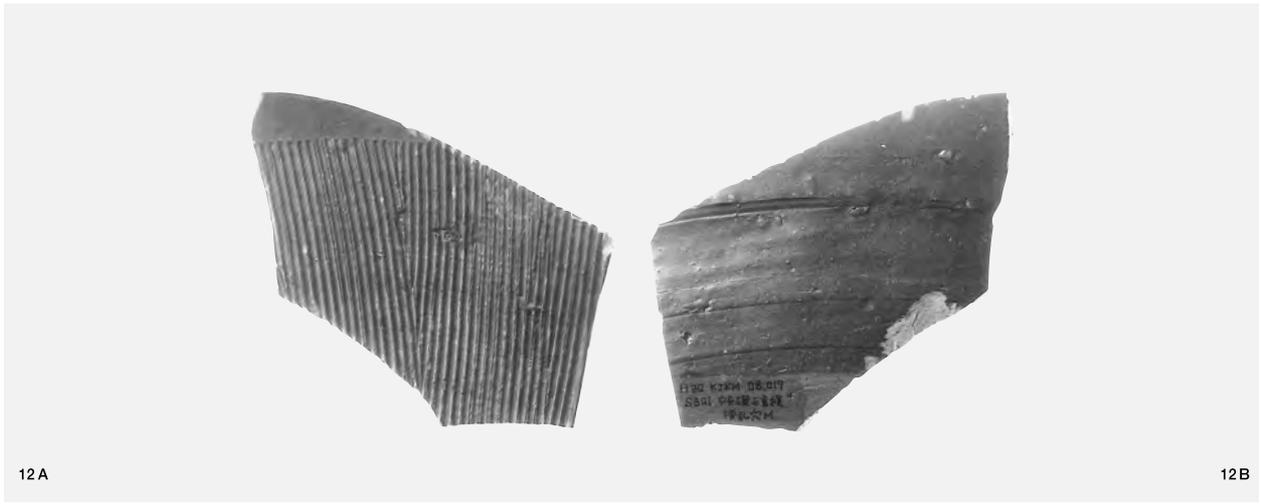
北側土塁第2トレンチ全景 (西から)



北側土塁第4トレンチ全景 (北から)

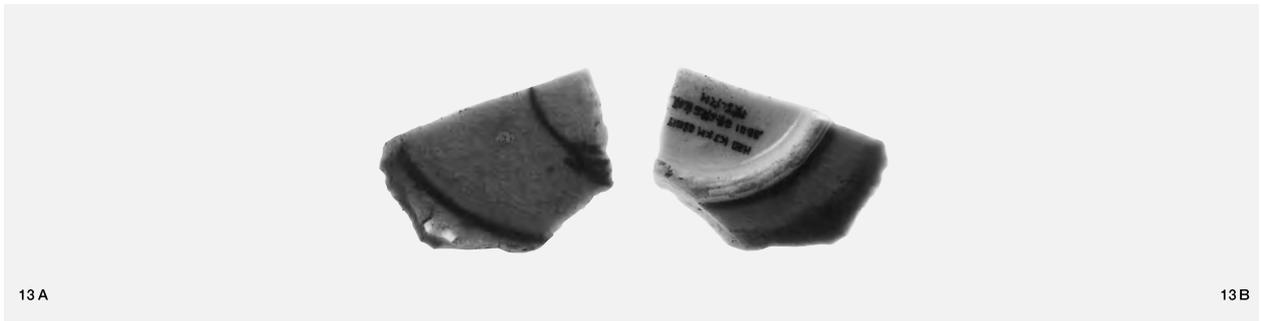


1 ~ 11 遺構外出土遺物



12A

12B



13A

13B



1



2



3



4

图版8

12、13 遺構外出土遺物

1 遺構内出土瓦

2～4 遺構外出土瓦

報告書抄録

ふりがな	くぼたじょうあと							
書名	久保田城跡							
副書名	千秋公園再整備計画黒門再建に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	西谷隆							
編集機関	秋田市教育委員会							
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王二丁目1番53号山王21ビル内 TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252							
発行年月日	2009年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くぼたじょうあと 久保田城跡	あきたしせんしゅうこうえん 秋田市千秋公園 地内	05201	217	39° 43' 14"	140° 7' 41"	20071102～ 20071210 20081014～ 20081212	150 80	千秋公園再整備 計画黒門再建に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久保田城跡	城郭	近世	門跡 柱列 1基 溝跡 7条 橋脚掘り方		陶器・磁器・瓦		黒門およびその周辺の調査。黒門の規模や内堀にかかる唐金橋の橋脚掘り方を検出。	
要約	久保田城跡はJ R秋田駅の北西約700 mの千秋公園を中心とする地域で、黒門は登・下城の際の正式なルート上にあった重要な門である。平成4年、同19年、そして今回の調査で黒門の規模や位置が確認された。							